

論 説

時間観念を巡る日中の「文化溝」の考察と デジタル時代に於ける伝統回帰の展望（上）

夏 剛

世界の常態と乖離した日本の常識：清潔・精確・配慮の3美点

松本清張の『点と線』の中の刑事が入浴中ゆったり思索に耽る一齣は、風呂好きの日本人の皮膚感覚を体現する妙味が有る、と言う日本の識者の指摘は興味深い¹⁾。古代希臘の賢者が浮力定理の想を得た場所も浴槽なので、^{インスピレーション}靈感浮上の状況自体は日本特有の物とは言えないが、外国語に訳し難い「いい湯だな」²⁾と同じく、彼の心身の癒しの満喫も一般の中国人には縁遠い。何しろ中国の多くの地域では、水・電力の不足に因り入浴を楽しむ習慣が無い³⁾。

此の名作が隠し持った最大の日本的な特色は、列車や飛行機の複雑な乗り換えに由る^{アリバイ}不在現場証明の絡繰に他ならぬ。交通機関の時刻表の隙間を詭計に使う推理小説は日本では多いが、大抵の外国では予定通りの運行が期待できない故に、左様な計画は最初から成り立つまい⁴⁾。此の事象は日本の常識を世界の非常識とする日本異質論の証にも成ろうが、交通機関は定刻を守るのが常識だから、此の点では世界の現状こそが非常識と言うべきだ。

宇宙航空事業団理事長・山之内秀一郎に拠ると、英国の中・長距離列車で5分以内の遅れで運行しているのは70%に過ぎず、^{フランス}仏蘭西では89%が其以上の遅れで走っている、と最近の仏の鉄道雑誌の記事は書いたが、東北・上越新幹線を走る1日3百本弱の列車の遅れは平均10秒未満だ⁵⁾。1分以上の遅れを遅延とする日本に対して、仏では近郊列車と長距離列車は其々5分、14分以内の遅れは定刻と見做される⁶⁾ので、日仏の開きは一層大きい。

東洋の仏蘭西と言われる中国との落差は更に広がるが、最初に日本に列車ダイヤを持ち込んだ英国⁷⁾よりも模範的で、律儀な独逸や^{ドイツ スイス}瑞西よりも律儀な処⁸⁾で、日本鉄道の仕事は世界一の誉れに恥じない。東日本旅客鉄道会長を経て2000年に現職に就き、知仏派の国際人として有名な山之内も、列車運行の正確さを日本の鉄道の誇りとし、其の几帳面さを日本人の誇れる資質と讃えた。但し同時に、時として形式的に成り過ぎる嫌いにも言及した⁹⁾。

1988年に訪日した英国の少年歌手・A・ジョーンズは曰く、「街や地下鉄の駅が清潔で列車が時間通りに来るのはは^{びっくり}吃驚。人は皆親切だし、もうすっかり日本^{びいき}虜^{しま}に成って^{しま}了^{しま}った。」¹⁰⁾ 其の前年来日した私も同じ^{カルチャー・ショック}文化的衝撃と感銘を受け、独・蘭^{オランダ}に定住し多くの国を旅した弟の第一印象も一緒だ。英国は島国と「紳士道」で日本と通じ、規則厳守の国民性が名高い独逸と同じ清潔好きにだけに、此の3つの美点の相関と突出は日本の特徴に違い無い。

欧州^{あた}辺りでの滞在を終え暫らく他国人の目で自国を見た作家・池澤夏樹の『日本の印象』は、滞在歴の浅い異邦人と着眼点が重なり合いながら、無条件の礼讃とは趣を異にした。「まずは、清潔。成田というのは決して使い易い空港ではないが、ともかくピカピカに磨いてある。ノ次に、自動販売機や公衆電話や電車などに故障が無い事に感心する。交通機関が時刻表通りに動いている。この国の人々は機械を作って使うのは大変に上手らしい。」

日本人同士なら意思が好く通じる事を前提に気配りを強調し消費者を満足させる、という^{サービス}奉仕の周到さを肯定した上で、「処によって電車とホームの間が空いておりますので、足元にご注意下さい」云々の^{アナウンス}放送は、同じ状況に対して“Mind gap”^{ロンドン}だけで済む^{ロンドン}倫敦の地下鉄に比べて些か冗長だ、と氏は付け加えた¹¹⁾。確かに、日本との付き合いが長く成るほど、緻密さ・親切さの「過ぎたるは猶及ばざるが如し」の側面が否応無く目に付いて来る。

「文革」世代の無頼派作家・王朔は、中国の推理小説の粗末さを犯罪の水準の低さに帰した¹²⁾。日本の推理小説の質の高さは逆に、構想力と実生活の両方の豊富・洗練さに困ろう。日本人は自国の特質や魅力に気付かぬ事が多いが、中国人初のノーベル文学賞に輝いた高行健は、微に入り細を穿った日本文学の精密描写に衝撃を受けた¹³⁾。一方の魯迅は人間の肖像を例に、髪の毛一本一本を克明に描いても肝要な目を疎かにすると詰まらぬと断じた。

『点と線』の刑事が犯人を「時間の天才」と称したのは、駱駝が針の目を通る様な離れ業を思えば納得できる。推理小説の巨匠が秀才官僚の頭脳に託して編み出した完全犯罪の^{アイデア}意匠は、善悪を超えて、日本人の徹底的な完璧を期す計画性、手順に拘る真面目さと其の落とし穴を思わせる。日本人の野球・相撲好きは定型を好む習性が一因とされるが、此の手の小細工は型に嵌まれば強い反面、約束事的前提が崩れると硝子細工の如く脆い¹⁴⁾。

過と不足：完璧志向・形式主義と多動・忙殺の中空・^{バブル}泡沫

高度な清潔・精確・配慮は日本人の潔癖や職人根性、善人性の^{たまもの}賜物だが、世界的には奇異・贅沢の部類に入る。公衆電話が^{いたずら}悪戯等で好く壊れる中国に比べて、公共施設の故障僅少は立派で有り難いが、自動販売機は犯罪の標的に成り易いから外国では滅多に設置されない。過剰な衛生が抵抗力を低下させた結果と同じく、無風・温室状態の^{もと}下での心地好さは弱点や限界が有る。神経が届いた気配りも場合に因っては、不本意な無神経に転じ得る。

時間観念を巡る日中の「^{カルチャー・ギャップ}文化溝」の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

山本五十六が命を落としたのは、時間厳守の律儀さの所為^{せい}が大きい。戦地視察日程の暗号電文を解読した米軍は、彼の遅刻嫌いの性格を根拠に、或る空域を或る時点で通るはずだと睨んだ。予測と寸分の狂いも無く其の特別機が現れた瞬間に、待ち伏せの米軍操縦士^{パイロット}が目を瞠^{みは}った。軍の統帥は厳格な時間観念が無くては成らないが、詳細な予定を現地に打電した部下の気配りと共に、安全を保つ為に欺瞞も必要な戦争の中では生真面目過ぎた。

日朝首脳会談^{せつかく}で折角北朝鮮が日本人拉致を認め謝罪したのに、小泉首相は其の件を宣言に入れようとせず先方の案を大人しく呑んだ。帰国予定まで4時間しか無く文言調整の余裕が無い、と言う外務省官僚の判断で断念したらしい。交渉の結果は国益に関わり歴史に残るので、時間の機動的な再配分や延長を含む調整は何故出来なかったのか。戦略的な目標よりも事務的な予定、人間よりも道具を優先するとは、本末顛倒と思われて成らない。

当日の拉致被害者名簿の翻訳の遅れも問題に成ったが、真珠湾奇襲通告の人為的な遅れも律儀さが裏目に出た失敗だ。誤字が出る度に破棄して清書し直した駐米大使館員の真似は、度を越した完璧主義や形式主義の典型と言える。世紀の戦災の勃発に似合わぬ優等生の繊細さは余りにも奇特だが、日本に「欺瞞」の汚名を蒙らせた此的一幕の誘因は、大半の館員が仲間の送別会に繰り出た事で、緊張感の不足は山本海軍大将の悲劇と大同小異だ。

日本流の時間の使い方には、神経質さとは裏腹の暢気さも目に余る。或る米国人は^{バブル}泡沫経済期の東京のオフィスで、「企業戦士」の「猛烈」伝説と乖離した光景に驚いた。日本の管理職や社員は数十分も早めに会社に顔を出す代りに、悠然とお茶を飲み新聞を読み雑談を興じ、始業時間に成ってもフル回転しないが、自ら勤務して来た本国の企業では、大半の社員は定刻直前に出社する半面、直ぐ悲壮な表情で仕事に取り掛かるのだ、と述べた。

其の頃の中国では米国と同じく、定刻ギリギリ出勤し退社時間にさっさと帰る者が多かったが、直ちに仕事に集中し切れぬ点は日本と一緒だ。国際競争に勝てなかった事は、其の勤務態度を見ても頷けるが、日本が世界一の経済大国に成れなかったのも、其の日米企業の緊張度の差でも説明が付く。^{バブル}泡沫崩壊後、知米派の宮澤喜一首相は米国の労働倫理観の欠如を貶したが、抗議を受けて調査した結果、米国の生産性が遥かに高い事が判明した¹⁵⁾。

実績の裏付けを欠いた其の独善的な自慢は、経済敗戦を招いた慢心が根底に在る。日本の成長神話の色褪せに連れて、表面的な繁栄の様々な空洞が露呈した。日本人の自負や自嘲の対象と成る忙殺には、利益無き繁忙を追う不毛が意外と多い。役所の「欠勤せず・遅刻せず・働かず」は、企業でも「在现场証明」として儘有る。鄧小平の資本主義化実験の「時間は金銭なり、効率は生命なり」の観念に照らせば、日本は寧ろ社会主義的である。

中国人は儒教の伝統から家族を大事にし、米国人並みに個人主義が強いので、業務時間の終了後も退勤しない日本人の性向を特に訝^{いぶか}しむ。周りに気を遣って帰り難い心理よりも、手当欲しさで残業に持ち込みたい打算の方が理解し易いが、後者の場合は組織の経済観念が疑われる。

もっとも、其の能率低下の仕組みは賞罰と関係無く、一日中の稼働時間を細く長く平均的に配分し、体力の温存に腐心する農耕民族の遺伝因子だと見る向きもある。

電車内の居眠りの横行はともかく、国会での居眠りの蔓延は同じ聖域での野次と共に魔訶不思議だ。礼に始まり礼に終る日本の芸道の型と合わせ考えれば、其の動と静、躁と鬱は一種の中空と思える。通過儀礼として手紙に欠かせぬ時候の挨拶は、季節に敏感な日本人気質の表現であるが、雑誌発行日が好く1ヶ月以上も先取りする性急さと、負の遺産の処理を十数年も先送りし続けた悠長さとの同居も、緊張と弛緩の奇妙な組み合わせなのだ。

「忽熱忽冷」(熱し易く冷め易い)病：博^{ばくち}打的な焦燥・短絡・衝動

日本人は機械の製造・使用に長け、時計の如く規則正しく動く観も有るが、精密時計が名物で職人氣質や平和志向を共有する^{スイス}瑞西に比べると、時間を味方にする心・技の不足が明らかだ。瑞西のプライベート・バンクは2～3代に亘って顧客と付き合いが、日本の金融機関は頻繁な異動・辞職に困り真似できまい。因みに、曾て日本の某電機メーカーが催した数十年単位のタイム・カプセルは最近、担当者交代の為に開錠方法が解らなくなった。

製造業の強さと対照的な日本の金融業の弱さ¹⁶⁾は、時間哲学にも一因が考えられる。2000年2月2日、国内最大の証券会社の名を冠す「日本株戦略ファンド」が運用を始めた。空前の1兆円規模は全民的期待を映したが、基準価格が下落の一途で約6割も吹っ飛んだ¹⁷⁾。発足直後の世界的IT株の^{バブル}泡沫崩壊を思えば、「戦艦大和」の擲¹⁸⁾は酷過ぎようが、初動段階で資金を投げ切り身動きが取れなくなった経緯から、僥倖心や無謀は否めない。

同^{ファンド}基金の運用に当る投資顧問会社から独立した某投資家は、同年の老舗マネー誌で月次実戦録を連載したが、元本倍増の目標は見事に空振りに終わった¹⁹⁾。資金の3分の1を失った敗因には、年初の数日に相当部分を投下した事が有る。日本株が史上最高値から反転したのは正に10年前の大発会の事だから、経験済みの教訓は生かされなかったわけだ。日本経済の底力を信じたいと言った動機も情緒的で、大衆の啓蒙者と自任したプロらしくない。

日本の個人・機関投資家は内外で、度々指を銜え続けた末に痺れを切らし、終盤に飛び込んだ途端に高値を掴む^{はめ}破目に陥るのだ。曾て平成天皇の論文を独占掲載した程の有力総合月刊誌は、2002年夏に「総力特集 中国不信」の一部として、中国株投資の体験記を企画したが、中国と縁の深い実践者は1日で全資金を投じた後、「日程の関係」で僅か十数日しか保有せず、其の間9割の銘柄を一遍に乗り換え、末に^{ひど}酷い損切りに踏み切った²⁰⁾。

一連の事例の可笑しさは、^{ファンド}基金の社会資産運用の宗旨と投機的行動、無期限運用の設定と超短期的資金投入との矛盾、個人投資家は機関投資家と違って単年度の成果を追う義務が無く、株投資は全人生設計の一環だと言う新観念と、「伝道師」の期限付きの例示との撞着、

時間観念を巡る日中の「文化溝」^{カルチャー・ギャップ}の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

中国株の魅力は日本の高度成長期並みの可能性で、対象企業と共に成長して行く長期投資が醍醐味だ、と王道を喧伝しつつ月単位の勝負を煽る媒体^{メディア}の言行不一致だ。

以上から読み取れる傾向として、昭和天皇も日本人の国民性とした「熱し易く冷め易い」気質²¹⁾が先ず思い当る。衝動買いや損失分の「塩漬け」は、種を播いた後は天運に頼る農耕民族の保守性、「待てば海路の日和有り」の島国的心理と符合する。晴れ舞台で高揚する戦闘的激情や希望的観測に駆られた短期決戦と、楽勝の目論見が外れた頓挫は、曾ての対中・米戦争の堪忍袋の緒が切れた後の盲進と、「一撃必成」の不首尾と二重写しに成る。

社会的責務を負う機関投資家の冒険と自滅は、日本の金融敗戦と政治・外交の海図無き漂流の縮図に見える。小泉首相の人気や手法も瞬時沸騰や祭りの乗りが目立つが、「不退転の骨太改革」の掛け声は一向に実を結ばない。相手が焦るはずの日朝交渉で自ら見切り発車をし、漸く漕ぎ着けた首脳合意も竜頭蛇尾に終わった。其の場の雰囲気^{あだな}を決断の基準にしがち²²⁾の彼は、「賭博師」^{ギャンブラー}と呼ばれて仕方が無いが、背景と成る構造的要因に注目したい。

異常な高支持を集めた小泉政権の誕生直後の2001年5月、日経平均株価は根拠無き熱狂を映し、新年度資金の流入にも支えられ高値を付けたが、其の後の下落で「半値内閣」の渾名が生まれた²³⁾。戦略無き日本株基金^{ファンド}の負け戦を彷彿とさせた喪失幅だが、平成は元年に株式市場が崩壊した時代だから宿命の要素も有る。昭和末期の大衆株投資熱を点火した資産運用誌の例の実戦録の連載期間と似通うが、平成の首相平均任期は1年半にも成らぬ。

平成の暁に疑獄で辞任した竹下首相の後任は、「消費税は永遠に上げない」と公約した。あくまでも自分の在任中を指すと慌てて釈明したが、女性醜聞^{スキャンダル}に因り67日で失脚したので実に滑稽だ。周恩来は近視眼的傾向を日本の政治家の致命的欠点とした²⁴⁾が、「一流」の官僚も大同小異である。2002年の株式市場の低迷の一因は、売買時期に応じて1年毎に税率を変える新制度の導入への嫌気だが、其の漫画的改悪は役所の単年度主義にも困った。

立体感・全体性の稀薄：即時・即物・即事的「歳時記」行程表

官僚主義の温床として「霞ヶ関歳時記」が指摘された²⁵⁾が、此の日本独特の比喩は季節感と生活観の一体化、人事に対する自然の優位を窺わせる。日本ほど四季折々が鮮明で均等な国、日本人ほど周期と関わりが深い民族は珍しいと言う²⁶⁾だけに、特異な時間観念は気懸りだ。時々・段々・次第々々を言う和語の「折々」には、此の国の折り目正しさと「刻板」(型通り。機械的。紋切り型)、緻密さと線の細さ、几帳面さと二面性が感じ取れる。

世紀の交に世界へ通貨緊縮を輸出した平成不況の一因は、企業・個人の資産防衛や投資・消費圧縮に因る「合成の誤謬」とされる。個々の合理的な行動が複合して全体的には誤り得るとは、経済学に限らず人間社会の森羅万象に当て嵌まる。時間の捉え方に関しても、一時・一刻

の正確さは広い視座では正しいとは限らぬ。意味深長な事に、中国語の「正確」は日本語と違って性質の正しさを指し、数量や時刻の正確さは「^{デュワンチュエー}準確・^{ジンチュエー}精確」で表わす。

1998年に破綻した日本長期信用銀行が2年後外資系投資基金に買収され、新生後に豹変した事は、「第二の敗戦」の典型例として語り継がれて行こう。政府は20兆円の資産規模に似合わぬ10億円で売却し、債権の不良化分の補填まで約束した。此で取引先は安心して融資を受けられると言う政府首脳喜びを嘲笑う様に、新経営陣は強引な取り立てで取引先を追い落とし、瑕疵担保契約を盾に国に買い戻させ、日本の二次被害で二重儲けをした。

銀行幹部だった作家・江上剛は、此的一幕を辛辣に評した。「契約の隅々に眠っているような条項を引っ張り出して自分に有利に運用する。それも世間にお構いなくだ。これは日本人には出来ない。この事件で新世紀銀行を悪者扱いにすればするほど、政府の甘さ、馬鹿さ加減ばかりが目立った。(略)後から考えれば、この契約を結んだ時は、はしゃぎ気味の政府関係者の隣で青い目をした人たちが、赤い舌をぺろりと出していたに違いない。」²⁷⁾

徳川幕府が諸外国と締結した不平等通商条約に比せられた其の合意は、目先の一件落着で安堵し時限爆弾を見抜けぬ間抜けな事だ。買収者の米国機関投資家は日本の銀行に欠けた「時間軸」を以て、瑕疵担保契約の期限内に迅速な回収を図り、日本人なら時間を費やす書類作りや根回しは省き、重要な案件も口頭で即決し1分も掛かるまい²⁸⁾。善悪はともかく、目標設定や進度への追求が甘い日本流の先送りは、格言の「善は急げ」には程遠い。

和辻哲郎は日本庭園の石の配置原理を、彼我の気を合わせるべく規則正しい形を避ける事とした²⁹⁾。熊倉功夫は桂離宮の雁行型遺構の形成の恣意性を、全体の枠組みの確定が前提を成す中国の建築と比べた³⁰⁾。紫禁城の左右対称の建築群や東西・南北へ広く延伸した中軸線が、中心点を基軸に四囲を囲って置く中国的枠組みの代表だ。其の仕組みは空間だけでなく時間の座標系にも見えるが、時間軸の在り方こそ両国の時間観念の相異の根源だ。

時間の枠組みには、時刻と時期・期間、時機と時限・期限、現在と過去・将来、形而下と形而上、等の多層・多重が有るが、松本清張の名作の題に因んで言えば、日本人は「点」の時刻に関しては拘りが強く正確さが際立つが、纏まった時間・期間の「線」の境域では、単線・「短線」(短期。中国の株式投資用語)志向が目立つ。「点・線」を超える「面・塊」(時代・歴史)に成ると、濃厚な即物性・即時性・即事性に因る「日本病」はより顕著だ。

長銀売却の失敗で批判を受けた政府は同じ2000年、日本債券信用銀行の再建で売却先を国内勢に絞ったが、新筆頭株主のソフトバンクは2年後に保有分の大半の売却を決め、米国投資基金の手に落ちる見通しと成った。長期保有の約束に反するとして金融庁は困惑と不快を示したが、契約の中の「長期」は期間の規定が欠落したので、3年とするソフトバンクの解釈には反論できなかつた³¹⁾。日本の常識や不備は又、外部の論理に衝かれた。

金融は命に次ぐ大切な物を扱い約束を命とするが、此の件は詰め甘さと言うより大前提の

時間観念を巡る日中の「カルチャー・ギャップ」文化溝」の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)
曖昧さが問題だ。健全な想定・洞察力に不可欠な全方位性は、時間・空間・人間・観念の枠組みや次元に渉る。青い目を締め出した日本は可視的な空間・人間の垣根(国籍・人種)に敏感な反面、不可視な時間・観念の幅や奥行きに対する把握は足りない。在日朝鮮人の創業者が社名から「日本」を削ったソフトバンクの国際性³²⁾も、見落とされている。

「短線・長線」の複線：時刻・時点・時機・時季・時期・時代の重層

孫は「帰化」³³⁾しても発想や行動は日本流に同化せず、一時投資会社の観を呈したのも日本離れている。外資の長銀買収と同じ不良銀行の優良化 転売の計画や、有望企業への投資や為替予約で利鞘を抜く手法も、「賭博場資本主義」の先端を行った。三百年の浪漫の設定と年・月・日次目標の管理の併行、米国の先行経験を日本に持ち込む「時間差戦略」等、彼の「孫兵法」では時間軸が柱を成すが、其の真髄は日本の短所に気付かせる。

中国でも「炒股票」(株を炒める)の熟語の通り、「股民」(個人株式投資者³⁴⁾)は短期売買を好む。自ら吊り上げた過熱相場で火傷し、懲りずに次の天井圏にも大勢が参戦する展開は、日本と五十歩百歩である。但し、其の投機性には利鞘を狙う貪欲さと共に、利益の確保に必死な臆病さが同居する。「炒」は「炸」(揚げ)と共に中国北方の料理法の主流を成すが、南方人の得意な煮込み・蒸し料理は、「文火」(とろ火)を使い長時間を掛ける。

株式文化の発達した欧米に於いて王道とされる長期投資は、中国では社会・人心の不安定に因り実行し難いが、長期投資を言う中国語の「長線」には、「放長線、釣大魚」(長い糸を出して大魚を釣る)の智術の根深さが窺える。中国人の遊撃戦的な投資行動は、体内に混じった遊牧民族的な気質の現れとも思われる。西洋人の狩猟民族的な機敏さ+大陸的な鷹揚さの複合と重なって、「文火」が示唆する中国の文武両道は時間感覚にも顕れている。

一人称代名詞の字形を比べれば、中国語の「我」の「扌+戈」は進取精神を感じさせ、日本語の「私」の「禾+厶(囲む)」は守成意識を滲ませる。損切りを渋り株を「塩付け」にする傾向が日本で顕著なのは、農耕民族の吝嗇や惰性に文化的な要因が有ろう。瞬時沸騰の習性を他方で持つのは不思議だが、此の文脈で交合した「炒・秒」の字形の類似は妙味が有る。「秒」の「禾+少」の字形は今風で解すれば、超短期志向の不毛の表徴と思える。

「移」の「禾+多」の字形は豊作を連想させ、「易・益」との同音も推移や変遷の有益性を示唆する。「易」の動詞と形容詞の意は変易の生じ易さに合致し、安易な利益追求も其の同根性に由来しようが、其が不利益な結果へ転落し易い宿命は、「移・易・逸・異」の同音・類義が表徴する通りだ。「易」の「日+勿」の字形は、時間観念に関する警告と思えて来る。晩年『易経』に傾倒した孔子の「天命」把握の勧め³⁵⁾も、自然運行の法則が主な着眼点だ。

兜町の覇者の乾坤一擲の旗艦商品は「お笑い日本ファンド」³⁶⁾の怨嗟を買ったが、「節分天

井, 彼岸底」を思い起こせば, 満を持して放った^{タイミング}時機も笑劇の要素を孕んだ。大蔵省は業界指導で此の類の格言を迷信と^{しりぞ}退いたが, 3月危機の繰り返しを見れば, 天に唾を吐く印象を禁じ得ない。歳末に芽生え年明け後に膨らんだ期待が萎む結果として節分頃に天井を付け, 売り疲れて3月下旬に下落が一段落するのが, 「非科学的」経験則の正当性なのだ。

「暑さ寒さも彼岸まで」の通り, 秋の彼岸も株式相場の転換点と成る。日米共通の「カレンダー効果」³⁷⁾の典型は1月高・9月安だが, 日本の持ち合い解消売りや決算発表前の手控え, 米国の税務対策の為の損失確定の売りに, 9月底の必然性が在る。毎年の暮れに翌年の相場つきの託宣が神社の^{しんさ}識記の形で兜町に出回り, 月次のうねりが好く的中されて来た。其の「天声」は実は証券界OBの創作だ³⁸⁾が, 歴史は天意と人為の複合産物に他ならぬ。

米国株式市場で9月だけに平均指数へ投資した結果と, 9月だけ避けて他の全期間で同じ投資をした場合の月間平均とは, 長期に累積すれば雲泥の差に成ると言う³⁹⁾。短い時機の重要性和長い期間の重みを思わせる此の現象は, ^{のんき}暢気な「日日は好日」や恣意の「思い立ったら吉日」への否定に成る。格言の「識時務者為俊傑」(情勢を好く識る者こそ傑物と為る)⁴⁰⁾は, 「投機取巧」(機を巧く取って利を図る)ならぬ大局的俊敏さを唱えるのだ。

孔子も「敏於事」(行動は敏捷に)と唱えた⁴¹⁾が, 「機会主義」(日和見主義)は「^{ジューハイ}機会」と同音の「^{ジューハイ}忌諱」(忌避)の対象だ。中国語の「^{ジュー}機・^{ジュー}忌・^{ジュー}即」の同音は, 投機を警告する響きも有る。時間は長短や性質に因り, 時刻, 時点, 時機, 時季, 時期, 時代に分けられる。中国語で行為の時点と言う語彙が動詞の前に来る事は, 「始めに時有りき」の発想を感じさせるが, 期間と動詞の位置が日本語と違う⁴²⁾処に, 時点と時期を峻別する意識が窺える。

日本的微視・写生と中国的巨視・「写意」の融合の可能性：時計と世紀の相互内蔵

中国語の「^{シージー}時機・^{シージー}時季」と「^{シージー}実際・^{シージー}実績」の同音は, 現実の境界線や人事の足跡と成る時間の性質を示唆する。日本人は時機・時季より短い時刻・時点に目が行きがちだが, 「実・事」志向や写生表現の伝統が微視的傾向の根底に有る。より長い時期・時代に価値を置く中国人の巨視性は, 重厚長大の好みと共に「写意」(抽象・朦朧⁴³⁾)表現の発達とも関わる。中国的「立体交差時間網」は, 点を線へ拡大させ実線を「虚線」(破線)で補う物だ。

日本の鉄道の正確無比は定刻厳守だけでなく, 所定位置に寸分のずれも無くピッタリ停まる処にも在る。外国では標記より若干の偏差が有っても, 乗客を含む関係者は違和感を覚えないから, 其の律儀さは日本人も自讃と共に奇異に映る程だ。エスカレーターの「着地点まで後5m」の注意書きも, 似た大仰な親切と思えて成らない。某市役所の入口の地面に自動扉が最も反応し易い処に描いた足型⁴⁴⁾は, 「刻板」を地で行く見本の観が有る。

地図で現在地を矢印と色で表示する丁寧さに比べて, 広域時間座標での現在位置に対する日

時間観念を巡る日中の「文化溝」の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

本人の把握は些か雑だ。印度の或る処で常に数時間も遅れる列車は或る日珍しく定刻通り着いたが、実は恰度24時間の遅刻なのだ、と笑い話は言う。鉄道事情の落後と国民性の大らかさに対する善意的な揶揄は、先進国に対する途上国の周回遅れをも言い得て妙だ。此を基に譬えて言うなら、日本的な定刻への拘りは一回り大きい単位を見落としがちだ。

時間軸の「軸」の「車+由」の字形は、自由に車を駆使用する機能の表意として面白い。些かの融通も効かぬ日本流の停車は、其の「靈活」(機動・柔軟)性ととの抵触も感じさせるが、さて置き、「車」の字形に「由」が含まれ、2字とも「田」「十」を含む処も示唆的だ。時計を言う中国語の「鐘」の簡略字の「鍾」の「金+中」、時刻を示す時計の針の「金+十」の字形は、「田」の4区分と合わせて、東西・南北へ伸展した紫禁城の中軸線を連想させる。

日本では「四半期」「四半世紀」の概念が有るのに、1時間を4等分する単位は何故か無い。英語のquarterに当る中国語の「一刻」(15分間)は、日本的な分刻みの時間感覚と中国的な時間感覚の桁違いを思わせる。「1小時」(1時間)も中国的な規模を浮き彫りにするが、「半小時」(30分間)の半分を「刻」とするのは、中国の対的思想に基づく四分法と見て能い。四半期を言う「一季度」と併せ考えれば、中国的な時間軸の原型が直観できよう。

時計の15分刻みの「一刻 半 三刻 一小時」は、地図上の東・南・西・北の位置及び展開と一致する。中国の時間・空間の座標系の同根性を示す様に、日本語の「東西南北」と語順が違う「東南西北」は、時計廻りの秩序を示現する。更に、春・夏・秋・冬の推移及び各々の特性にも合致する。好況の萌芽と不況のどん底は其々春と冬に譬えられるが、景気や在庫調整の時計廻りの循環周期も、四季や四方の移行の摂理に通じて規則正しい⁴⁵⁾。

売買量や株価水準を横軸・縦軸とし株式市場の熱気や低迷を示す逆時計廻り曲線⁴⁶⁾も、進行方向こそ逆と成るものの時計状図形の指針だ。周期循環の中の現在位置を客観的に捉える有効な指標なのに、天井圏に飛び込んだ例の巨大投資基金は活用しなかった。其の発足の時機と超短期的な一挙投入は、「木を見て森を見ず」乃至「枝を見て木を見ず」の観が強いが、尺度や鑑としての時間を示すのに時計が持つ限界や落とし穴にも気付かされる。

伝統的な時計は目盛りと長針、短針とから成り、短・長の周期は基本的に1時間と12時間だ。超短針の秒針も加わると分刻みの1循環も生じるし、「秒針」の字形に有る「少・十」の寓意を体現する様に、電子時計では0.01秒の表示を以て1秒の10分割×10分割まで実現した。時間表示の形態は斯くして細密化への一辺倒だが、24時間の周回遅れが同じ時刻に成る事が示唆する様に、分・秒・時間の単位を切り捨てた暦に比べて微視的な機能に偏る。

現代の時計では日・曜日の表示も一部付くが、月・年の登場は一般的に無く必要ともされない。元より人間が時計に求める確認の範囲は一昼夜の中の時刻だが、天体の名に因んだ「日・月」の対の不在は形而上の空白を意味する。和製漢語の「時計」^{シージ}と中国語で同音の「世紀」^{シージ}の単位も、^{コンピュータ}「2000年問題」で考えさせられた。秒から年までの表示が揃った内蔵時計は西暦

の最初の2桁の欠落に因り、世紀及び新千年の転換点で混乱が起きた。

市場の「金銭出納簿」(calender)に見る時間軸の「理・力・利」

秒・分・時・日・月・年の存在や事象は、一回り大きい時間単位の中で順次蒸発し捨象されて行く。東証株価の50年移動平均値は、全営業日の平均ならぬ年次最終値の平均が普通だ。一見精密さを欠く算式であるが、年中の最高値、最安値と終値の差が如何に大きくても、長年経ち他年の数値と平準化すれば凸凹が相当収斂される。日次・月次株価が終値を基準とする方式⁴⁷⁾も、任意の時点や全過程に対する節目や最終結果の重みを思わせる。

時計の単位に囚われ過ぎると、24時間以上の単位への目配りは弱く成りがちだ。其を補うカレンダーも、calenderに当る中国語の「日曆」と日本語の「曆。七曜表」⁴⁸⁾の様に、月を超える季や年の期間の存在感が薄い。中国人は「成段」(段落[段階]と成る。纏まった)の言い方を以て、一定の量を持った言語の意味群や期間を表わす。「整段」は其の段落・期間の終始・全体を指すが、律詩の様に均整な段落の他に変則的「成段・整段」も有る。

字数が長短不揃いでも要所で韻を踏む定型詩の詞は、日本人に馴染み易い律詩以上に中国的感性の奥義を秘める⁴⁹⁾が、長短様々の節目の並存も其の外観と滋味を持つ。「段」と同音の「短・断・端」は、端数の日で寸断された周期の在り方に当て嵌まる。日本株式市場の〇〇日、〇〇ヶ月等の波長⁵⁰⁾は、不規則的区切りで万能な靈驗も無いが、日数不均等の月や年に因り期間が微妙にずれる季節の様に、脈動を示す規則性が一応有る。

上記の日数は営業日を指し、月間も首尾の両端で算入されるので、市場原理を映す特殊な時間軸と言える。52週平均値の算出基準が260日である事は、1年=約52週=365日の常識に抵触するが、中国語の「假日」(休日)の「假」(仮。偽)を思い起こせば、頷ける正味期間なのだ。元より市場の営みは人間の営みの縮図で、calenderの語源のラテン語は「金銭出納簿」の意⁵¹⁾で、中国語の「時・市」の同音も市場と時間の相関⁵²⁾の表徴だ。

漢字の「時」は「詩」と同じ「寺」を含む点で、文学的抽象性や宗教的神秘性を感じさせる。「時」は日本語の音読みで「寺」と同じで「詩」と違うが、中国語では「寺」「詩」との発音の異同は逆だ。中国語の「時」の同音字に於ける「詩・実」の同居は、時間の形而上・形而下に跨る複合性や、中国人の詩歌精神・現実主義の重層を思わせる。「施・勢・使・始・事・失・矢・逝・示・視・識・史」との同音も、中国的時間哲学を解く糸口だ。

日本株の技術指標分析家の第一人者・佐々木英信は1998年9月、石油危機後の70年代の大底の74年10月9日 イラン革命後の世界同時不況から脱出した際の80年代の大底の82年10月1日 泡沫経済崩壊後の最初の2段目暴落の底の90年10月1日、という実例を挙げて、97ヶ月(当月から当月まで両端で数える故、実質的には96ヶ月)周期を指摘したが、直後の10

時間観念を巡る日中の「カルチャー・ギャップ」の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

月9日に付いた90年代の大底で、誠に律儀な左右対称が出来た⁵³。

其の前日、ロシア国債投資で失敗した米国投機筋の破綻で、ドルが変動相場制実施後25年来の最大幅の暴落を演じた⁵⁴。別の同時多発的「天数」の劇変として、北海道拓殖銀行の営業譲渡が伝わった97年11月17日、前日に年間最安値を付けた日経平均株価が年間最大幅で暴騰し、22日の山一証券破綻で再び暴落したが、佐々木の講釈に拠ると、同17～20日は589日、1032日、1297日、1496日周期が集中し、元より大変化の時機であった⁵⁵。

3～4桁の日数も不気味さを漂わせるが、其々通常の約26、47、59、68ヶ月に当る4つの周期が僅か4日間に集中したとは、松本清張の作品名を借りて言えば「十万分の一の偶然」⁵⁶に思える。1965年に政府の救済で倒産を免れた山一証券の今次の退場は、不良債権の処理の遅延に由り経営体力が限界に来た北海道拓銀等の破綻と同じく、起きるべくして起きた事だ。一見任意な時期には、人為を反映し且つ超越した天の意志や意図が読み取れる。

件の4周期の中で最短ながら2年を超す589日は、3桁も下2桁も割り切れぬ素数である。89を含む世紀の「巧合」(偶然の一致)として、1689年の英国『権利宣言』、1789年の仏蘭西大革命、1889年の明治憲法、1989年の東欧革命が目を引き⁵⁷。400分の1か精々1%の確率で、歴史に刻み込まれた均質な民主化進展の足跡だが、鉄道の進化史に於ける英に対する仏、英・仏に対する日本の「後来居上」(後発者の逆転勝ち)が再認識できる。

「グローバル・カジノ」時代に対する「一時二制度」の啓示

1989年の日本では年頭に昭和が平成に移り、年末に日経平均株価が大天井に達した。翌年に劈頭の株式暴落の先導で泡沫経済が崩壊したが、明治憲法を基盤整備完成の徴とする近代化強国の勢いの宿命的な衰退と解釈できよう。89年を基点に円規で百年や200年後まで想像図を描けば、国際社会の勢力地図の更新や世界史の新しい主役の出現、工業革命 情報技術革命に次ぐ新時代の到来など、今では想像も付かぬ栄枯盛衰の激変が現れよう。

20世紀の実質的な始まりと終りを、其々第一次世界大戦勃発の1914年と湾岸戦争の1991年とした西洋の識者がいる。年頭の湾岸戦争と年末のソ連解体を思えば、後者は新世紀の前奏と見て能いが、暦の時間と歴史の時期のずれが考えさせられる。「時は詩より奇なり」の命題が成り立つなら、散文的時間と詩歌的時間の「一時二制度」が有っても然るべきだ。1989年を締める大納会で大天井が形成したが、暦の節目との吻合は寧ろ例外的である。

米国で活躍中の投資基金運用者・大竹慎一は、太陽暦の9月末に始まるユダヤ暦や東洋の太陰暦の合理性を唱え、日本の相場年は暦年や財政年度と無関係のお盆明け～翌年7月22日だとした⁵⁸。日付が中途半端な終点は、6月末の株主総会に伴う化粧買いと8月の高校野球・盆休みに因る閑散⁵⁹の間に在り、大暑の前日に当る事が理外の理として思い当たる⁶⁰。共産党中

国の歳時記でも、避暑兼用の夏の政治局会議が1年の計の隠微な起点だ。

共産党中国で株式市場が設けられたのは、天安門事件直後の1990年の事である。建国後世界の市場から41年も断絶した自閉の後遺症も有って、法制整備や情報開示の遅れ等の欠陥が未だに有る。もっとも、戦後4年足らずで復活し1988年に時価総額が世界の4割も占めた日本の株式市場も、個人参加者を「投資家」の美名で呼びつつカモにする賭博場の様相が強かった。其の五十歩と百歩は規模格差と共に縮小し、逆転へ向う動きさえ出ている。

CCTV(中央テレビ局)の夜の「新聞聯播」(全国ネットワーク・ニュース)の天気予報で、時刻表示の傍で時計メーカーのCMが流れる光景⁶¹⁾は、社会主義体制下の経済資本主義化を端的に象徴している。企業の宣伝を頑なに避ける日本の公共放送は、寧ろ禁欲的で毛沢東時代と彷彿とさせる。近代化の生徒が教師⁶²⁾の先を逆に越した別の現象として、中国のテレビでは株式市況や技術指標に基づく分析が、日常茶飯事の如く行われている。

多くの一般紙に載る国内各市場指数の移動平均線付きのチャートも、同じ方式を取る『日本経済新聞』日曜版以外の全国紙に比べて専門度が高い。中国人は欲望が日本人に勝つとも劣らぬ反面、「数拠」(データ)にも高度な注意を払う。山勘に頼り感情に任せるより勝負の確率を勘定に入れ法則を重視する博打は、^{ばくち}骰子の出方を逐一記録する冷徹・^{サイコロ}真剣な勝負師を連想させる。善悪はともかく、「投機」は機会・時機への投入が本質なのだ。

蒋介石が上海株式商品先物取引所のブローカーを務め、上海の株式相場の風雲と人間模様を描いた茅盾の『子夜』が高い地位を得た⁶³⁾等、20世紀の中国では毛沢東時代を除いて相場参戦の風潮が盛んだった。下積みの頃に値動きを随時黒板に記し後に大金を動かした「^{フネージャー}經紀人」体験と、蔣の占術好き・迷信深さとを結び付ける見方も有る⁶⁴⁾が、「時は金銭なり」と其の敷衍の「時は軍隊なり」⁶⁵⁾は、彼と中共の軍事・経済の競争で立証された。

中国人は自国の優位性を主張する心理から、好く現代の流行の祖型を自国の古代に求めたがる⁶⁶⁾が、先物取引の先駆者の一人に范蠡を挙げるのは別に誇張ではない。彼は越王の幕僚として隠忍・雌伏の伝説を演出し、其々10年で人口・国力の増加と教育・訓練に専念するとの献策で、呉への雪辱を果たした。勝利後に保身の為に勇退し富豪に成り、「商祖」と尊崇されるに至った道は、鄧小平時代の「下海」(政界・芸能界から経営へ転身)の祖型だ。

其の「臥薪嘗胆」と「十年生聚，十年教訓」は、一代の戦略と日々の辛抱の合成として、中国の官民の典範と成って来たが、范蠡物語は中国の2つの欠如を浮き彫りにした。中国では理論好きや著述好きの国民性に因り、「秘すれば花」の日本と対照的に兵法書や文芸理論著書が昔から発達しているが、相場理論や理論化した投資実践記録は少ない。又、相場参戦者が数多いにも関わらず、「稀代の相場師」と喧噪される程の投資家は余り聞かない⁶⁷⁾。

稀代の相場師の秘伝が示す『論語』+算盤」仁・勇・智」の不易性・先端性

此の2点で中国に対する日本の優位性は、伝説的な18世紀の米相場師・本間宗久翁と其の秘伝書に体现されている。相場の値動きをグラフ化した罫線は20世紀には常識と成って久しいが、此の記録方式と予測手段を開発したのが彼である⁶⁸⁾。28年間も費やした其の論理の完結は、西洋で初めて統計の手法で経済・相場を予測したベンナー（米国）の理論発表（1875年）より79年も早かったので、世界初の相場分析家と言う誉れ⁶⁹⁾に値する。

近代日本が亜細亜で強兵・富国の道先駆け、世界第2の経済大国までに成長した事は、狂人の凶刃を見せた侵略戦争も含めて、強靱な意志の爆発・持続の結果と思える。現代の花形職業なる相場分析⁷⁰⁾の祖師が此の天涯孤島から出たのは、日本に於ける資本主義経済の早熟と共に、日本人の律儀な記録癖や完成度への執着にも要因が在ろう。漢籍の「三達徳」⁷¹⁾や干支を主眼に用いた彼の方法論は、東洋の智術の伝統の開花と捉えても^よ能い。

明治に流布し始めた「酒田五法」⁷²⁾は今、数値化した法則として世界的に知られているが、捨象されがちな哲理こそ生産性が高い。明治の時代精神を端的に語る^{キーワード}鍵言葉には、日本の資本主義の父・渋沢栄一の『論語』と算盤」が有る。本間宗久翁生誕200周年の1917年に、彼が常勝を収めた大阪で起業した松下幸之助は、役人の父が米相場で破産した事が契機で実業家を志したが、道徳と利益を同時に追求する指向性は本間、渋沢と一脈通じる。

本間の「機を待つに、即ち仁」「機に乗ずるに、即ち勇」「気を転ずるに、即ち智」は、仁義無き投機と儒教の徳目を天衣無縫に結合させた。「仁 = 忍」^{レン = レン}の等式は同音である中国以上に、自制の道徳律の真髄を示す⁷³⁾。其と対を成す「勇・智」の気概・機転は、和製漢語の「忍者」の意と合わせて、農耕的+狩猟的の複合性格を持つ。「米商内（米先物取引）は軍術なり」の命題は、「忍」の「刃+心」の字形と共に、儒・商・兵3家の重層を思わせる。

「松翁」⁷⁴⁾・松下幸之助が生まれた1894年、日本は日清戦争に勝ち軍国主義への傾斜を速めた。第2次世界大戦での道義・軍事両面の敗北に対して、「第2の敗戦」は儒・兵ならぬ商の経済・金融の領分である。1945年から1894年と同期間の51年経った1996年は、本間宗久翁秘伝・『三位伝』の完成200周年に当るが、此の年の6月26日に付けた日経平均株価の泡沫経済崩壊後の戻り高値の22666円は、天意を発信した均整な数に思われる。

25日の消費税引き上げの閣議決定や、企業の株主総会集中開催後の化粧剥げと共に、1年前からの反騰の幅が黄金分割率の上限に達し⁷⁵⁾、買い疲れも相当溜まった事が、長期調整を強いいた要因だ。本間翁の現代流で言う「反対思考法」は、正に時間・空間・人間・観念の軸を巡る盛衰への洞察に基づいた。2000年2月2日の発足で同じ2つの数が並ぶ神秘性を含む問題の日本株戦略投資^{ファンド}基金は、祖訓に背き大衆に同調した故に竹筵返し^{しつべがえ}を食った。

本間宗久翁の大局観の今日的意義は、逝去200周年の2003年に再び証明された。前の年に米国ナスダックと日本の指数が2割、仏・独が其々3, 4割強も下落した後、低迷気分で始まった世界の株式市場は、4月のイラク戦争後に一転して盛り上がった。年初から囁かれた日米株の34ヶ月で底を打つ経験則⁷⁶⁾は、期待より2ヶ月ほど遅れて現実と成ったが、前回の天井から^{ちょうど}3年経った⁷⁷⁾のは、相場格言の「小波3ヶ月、大波3年」の通りである。

大竹慎一が数年前に指摘した日本経済の32ヶ月周期⁷⁸⁾は、振り返れば哲理を感じる。「石の上にも三年」の通り3年目標で努力する処が多いが、期限の寸前に集中力が切れる故に^{したぶ}下触れして^{しま}う、と喝破した忍耐力の限界の根源は^{なるほど}成程だ。中国の格言の「行百里者半九十」(百里を行く者は九十里を半ばとす)⁷⁹⁾、「人無千日好、花無百日紅」(人の好運は千日続かず、花の艶は百日保たぬ)⁸⁰⁾は、^{まさ}正しく9割達成、千日未満で不発に終る此の周期と原理に合う。

1997年11月の山一證券経営破綻・金融動乱を軸に、32ヶ月毎の節目を検証すると、前の95年3月には阪神大震災の後遺症や東京地下鉄サリン事件の衝撃も有って株式市場が総崩れと成り、92年7月は^{バブル}泡沫経済崩壊後の政府緊急経済・株価対策の初発動(8月)の直前に当る。一方、其の後の2000年7月にはそごう百貨店の経営破綻が大型倒産の恐怖を増幅させ、次の今年3月には日経平均株価が20年ぶりの危険水域に沈み翌月に大底に到った。

イデオロギー 脱意識形態時代に生きる東洋の形而上的「革命」原理：変動+循環

同指数が大天井を付けた1989年末も同じ周期の節目に近く、更に約32ヶ月前に一旦底を突いたが、2回とも後の相場展開は格言の通り「山高ければ谷深し」だった。陰の極^{きよく}に達しては反発する場面も、長期下降の大勢の中で何度も有ったが、何れも陰陽原理の習性に沿った修正だ。毛沢東が愛読した『三国志演義』は、天下の大勢を「分久必合、合久必分」(分離して久しければ必ず合一し、合一して久しければ必ず分離する)と断じる。

「窮 變 通」の有為転変を説く『易経』⁸¹⁾は、運勢・帰趨を掴む方法論の提供に因り中国思想の究極の祖型と成った。20世紀世界史の^{キーワード}鍵言葉の「革命」は、『易経・革卦』の「湯武革命、順_レ乎天_一、而応_レ乎人_一」が語源だ。「革命」は辛酉の称でもあり此の年は陰陽道で変乱が多いとされ、日本では改元の際に避ける慣例が有ったが、第2次鴉片戦争敗戦後の中国洋務運動発足の1861年、中共創設の1921年は、奇しくも其の変革の節目に位置する。

同じく変事が多い為に好く改元された「革令」(甲子)・「革運」(戊辰)は、「革命」と合わせて「三革」と称される⁸²⁾が、20世紀の中国史を觀ても変易が目立つ。該当の1921, 24, 28年と81, 84, 88年は、1巡目には中共創設、国・共連合(24年)、孫文逝去(25年)、国・共決裂、中共軍創設(27年)、2巡目には華国鋒 鄧小平の体制移行(81~82年)、胡耀邦失脚(87年)、物価体系改革 金融恐慌(88年)、天安門事件(89年)が有った。

時間観念を巡る日中の「文化溝」^{カルチャー・ギャップ}の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

英語のrevolution(革命)も急激な変化と時間の循環の意を兼ね⁸³⁾、古今・東西不易の摂理を窺わせる。丙午・丁未を国家大乱の「紅羊劫」とする観念は、中国の権威有る『辞海』では「迷信」と断じられた⁸⁴⁾が、直近に該当の1966, 67年は「文革」の勃発と全面武闘の年だった。其の一巡前の「紅羊劫」の2年を挟んで、1905年に孫文が日本で中華同盟会を結成し、朝廷が科挙を廃止し、08年に光緒帝・西太后の急死で清朝は末期に入った。

明朝誕生の1368年も「紅羊劫」の直後だが、明、清の276, 267年の寿命は300年単位で考えれば、「行百里者半九十」の証に成る。毛は明・清の滅亡を教訓に「歴代興亡周期率」への超克を志した⁸⁵⁾が、60年の倍数の循環は彼の次の次の次の時代にも現れた。胡・温体制発足の前後に中国は致死性新型肺炎の直撃を受けたが、360年前の明末の1643年の北京疫病大流行との暗合は恐ろしい。甲子で始まる干支は今後も、波乱と律動を生み続けて行こう。

「子繁盛、丑躓く、……」^{ねずみ うしつまず}と言った日本の相場格言は、牽強附会の様だが長年の干支の騰落率で証明されて来た⁸⁶⁾。春分や秋分を祭日とする事も日本の守旧性の現れと見られようが、新暦と旧暦は優劣が無く、「科学的 = 先進 / 非科学 = 後進」の断定も出来ない。現に、江戸時代の米相場覇線は西洋のチャートを先行し、米国の金融工学の危険回避^{リスク・ヘッジ}の手法は、日本の数学者・伊藤清の定理を使い、1730年に設立した大坂堂島米会所の先物取引が原型だ⁸⁷⁾。

経済学の常識と成る主な景気周期の波動は、在庫循環のキチン波(約40ヶ月)、設備循環のジューグラー波(6~13年、平均8年)、建設循環のクズネッツ波(17~20年)、総合循環のコンドラチェフ波(50~60年)が有る。短・長期の間の中期の下・上限は、12支の半分~全部に当る。技術革新や農産物・金の生産高^{きん}、資源供給、利権絡みの戦争、革命等の指標に基づく超長期の は、上限が干支の1周に当り下限が12支の約4倍だ。

12「生肖」(12支)の周期は西暦の1年の12ヶ月等分と妙に通じるが、コンドラチェフ波とスカートの長短の流行周期⁸⁸⁾との不思議な符合は、干支の60年に対応する人間の寿命と景気の超長期波動の相関を示唆する。景気の短、中、長、超長期循環の浮沈は、株価の超短、短、中、長、超長期(数日、数週、数ヶ月、数年、数十年)の移動平均の起伏や、人体の所謂バイオリズム(身体・感情・知性の波動周期、其々23, 28, 33日⁸⁹⁾)とも似ている。

体内時計の周期は操縦士^{パイロット}の健康管理や患者の治療等に一定の有効性を持つと言われるが、各波動線の高低の複雑な組み合わせと同じく、景気の短、中、長、超長期循環の上昇と下落も多重の交錯が有り得る。2000年春のIT泡沫経済崩壊^{バブル}と其以降の世界同時不況は、同年後半の建設循環クズネッツ波の底割れや、其の前後の総合循環のコンドラチェフ波の低迷に必然性が見られる⁹⁰⁾が、全ての循環波が上昇か下降する一方向の状態は寧ろ少ない。

(未完)

2003. 8. 29 ~ 9. 2 初校了。此の間、世界的な気象異常の中で、日本は10年ぶりの冷夏に続いて、厳しい残暑（中国流では「秋老虎」）に見舞われた。米投資^{ファンド}基金・サーベラスに由るあおぞら銀行の株式公開買い付け [TOB] が完了し、同社がソフトバンクに代って筆頭株主と成った。『点と線』初出の『旅』月刊旅行誌 [1924年創刊] が、1997年以來の連続赤字に因り、旅行最大手のJTB（2001年までの日本交通公社）から新潮社に移管された。

10月9日再校了。1974、98年に日本株式市場が大底を付けた此の日（註53参照）、円高を阻止する日本の執拗で大規模な介入も甲斐が無く、円の対ドル相場が115円に次ぐ第2の防衛線の110円台を突破し、2年10ヶ月ぶりで108円台に突入した。大統領選の周期に暗合する米株式相場や米ドルの2年高 2年安の循環が再度証明されたが、ノーベル経済賞受賞者の米国2教授の参与した投資^{ファンド}基金が破綻に陥った5年前と違って、天下大乱の様相も多事の秋の気配も無い。米国株式市場の主要指数は前年の此の日に情報技術株泡沫崩壊後の最安値を付けたが、ダウとナスダック指数が1年で其々33、72%上昇した。猶、前日に今年度ノーベル経済賞が米・英の2教授に決定され、経済予測等に使われる時系列手法を確立し精度を高める貢献が受賞理由だ。

注

- 1) 日本人の風呂好きや皮膚感覚に関する多くの言説の中で、本稿の論旨に即して、特に多田道太郎の『遊びと日本人』（筑摩書房、1974年）の「風呂の楽しみ」「怠惰の思想」の2節、『風俗学路上の思考』（筑摩書房、1978年）の序章・「風俗 そのメッセージ」に注目したい。
- 2) 多田道太郎は『遊びと日本人』（註1参照）の中で、「いい湯だな」が「日本人のレジャーの基本的なもの」と断じた。此の感嘆は英語に訳し難いと言われるが、強いて中国語に直しても、「不錯」（悪くない）や「不冷不熱」（冷たくも熱くない）の類いの即物的な適温の意に成り、快適な極楽気分の表出には直結し難い（但し、多田道太郎が「なぜ熱い湯好きなのか」[1983年]で言及した通り、日本人は外国人が恐怖を感じる程の熱い湯が好きだ [『多田道太郎著作集5 現代風俗ノート』、筑摩書房、1994年、248～249頁]から、「不冷不熱」の訳外的れか）。風呂の湯への讃えが歌の形で全民的に親まれるのも、中国人には異質な事象である。
- 3) 東京電力エリートOL殺人事件を脚色した桐野夏生の長篇心理推理小説・『グロテスク』（文芸春秋、2003年）では、検挙された被疑者として中国人（実際の係争中の被疑者はネパール人）が登場する。「文革」勃発の1966年に生まれた此の男は、改革・開放の波に乗って四川の田舎から飛び出し、広州・深圳での出稼ぎを経て日本に密入国したが、中国の沿海部都市と比べ物に成らない豊かさを前にして、金を貯めて現地の人々並みに豊かに成りたいという国内出稼ぎ時代の思いも、虚しく感じられて成らなくなった。彼の目に映った日本の素晴らしさは先ず、「旨い食物は腐るほどあり、水道の栓を^{ひね}れば安全できれいな水がふんだんに出て来て、お風呂も入り放題。隣の町や村に行くにも、徒歩や、いつ来るとも知れないバスを待つのではなく、三分おきにやって来る電車に乗れば行くことができる」処だ。次に挙げた羨望は、十分な教育の提供、理想的な就業の実現、美しい洋服・携帯電話・車の所持、良質の医療の保障である。（274頁）

作品の参考文献の『盲流 中国の出稼ぎ熱とその行方』（葛象賢・屈維英著、武吉次郎訳、東方書店、1993年）、『東京チャイニーズ 裏歌舞伎町の流氓たち』（森田靖郎、講談社文庫、

時間観念を巡る日中の「文化溝」の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

1998年)には、類似の記述は無いから、追体験や想像に基づいた作者の虚構と思われるが、此の告白は日本人の感受性と優越感を滲ませながら、中国国内の「第一世界」(超富裕地域)も及ばぬ日本との経済格差や、平均的な中国人の生活観の理想を活写した。飲食の次に風呂が出る処は奇妙な感じもするが、風呂は加熱の電気も必要条件なので、水と電車の間の天衣無縫の繋ぎ目に成る。風呂の恒常的な利用が中国で難しいのは、電力の深刻な不足も要因であるが、衣・食・住に次ぐ行(交通)の領分の交通機関の秩序も、其の社会基盤整備の課題の内に入る。

更に上記の観察・思索を裏付ける材料として、藤本健二の『金正日の料理人』(扶桑社、2003年)を挙げよう。高収入で釣られて海に渡り朝鮮(民主主義人民共和国)の領袖に仕えた著者は、故国の糟糠の妻と離縁し異国の民謡歌手と結婚し、要人用の高級住宅に入居し贅沢を満喫したが、好きな時に何時でも入浴できる事も大変な特権だ。一般のアパートでは水が朝・夕の2回しか出ないので、特別扱いで其の秘密の快適な巢(中国流では「安楽窩」)を訪れた夫人の両親は、「お湯が出る」と大喜びで風呂に入った(62, 70頁)。

光熱費を「水電費」と言う中国人は、水道と電力を対で捉えがちだ。朝鮮の風呂の不自由の要因は、深刻な電力不足も直ぐ思い当る。衛星から撮った夜の朝鮮半島では、電力供給の落差で南北の明暗が鮮明な対照を成す。中国の衛星写真でも沿海と内陸の間に大差が見られるが、近年の中国で朝鮮観光が流行った秘密は、自国の往昔を追憶する動機が大きい。地球上の最後の「封建的社会主义」の秘境への探訪は、毛沢東・華国鋒時代と二重写しに成る「時光旅行」(タイム・トラベル)に他ならぬ。

四半世紀ほど隔たった両国の現実には、「時間溝」の論考で発展時差の問題を提起する。筆者は1986年に中国『当代作家評論』誌、1989年に岩波書店『文学』誌で、近代以来の日中の約30～40年の発展時差を指摘した。社会や文学に軸を置いた其の仮説の根底には、上海から黒龍江に行かされ発電所建設に従事した「文革」体験があった。全国最大の工業・商業都市と最北の農業・林業地帯とは、急行汽車で片道39時間も掛かったが、生活や意識の差では昨今の日中間、中朝間の様に数十年も開いた。

『グロテスク』の四川・広東の超満員列車の赤裸々な裡面の描写で、30年前に渾名・「海賊列車」で上海・黒龍江を往復した筆者の苦勞が蘇った。来日前に両国の発展落差を直観できた事に筆者は先駆の自負も有るが、文献で事象を入手・利用できるから大した事が無い。諺の「秀才不出門、全知天下事」(秀才は家を出なくても、天下の事を全て知り得る)は、情報化時代の研究者にも当て嵌まる。土地勘・「言語勘」(筆者の造語)が無いはずなのに、迫真の臨場感で中国人の筆者を感心させた桐野の離れ業こそ凄い。

彼女が『OUT』(1997年)の取材で肉迫した自国の底辺の暗部は、中国の出稼ぎ労働者の造形の肉付けに役立ったのだろう。其の「深夜の弁当工場に見た“奴隷労働”の女たち」(『週刊エコノミスト』2003年2月18日号、66～68頁)は、経済敗戦後の中流消失の現れよりも高度成長の影と捉えたい。本稿では同じ空間の中の経済時差を世界の発展不均衡と結び付け、「女工哀史」の名残りが漂う昼夜倒錯を「コンピュータ社会」の「白領」(ホワイト・カラー)階層の常時窒息と較べて、先進国と周回遅れの途上国との五十歩百歩を指摘したい。

4) 1980年代中期の中国の二流大衆文学誌に掲載された推理小説では、列車時刻表を利用する不在現場証明の小細工が試みられたが、余りにも現実味が薄い故に話題にも成らず模倣作も出なかった。

5) 9) 山之内秀一郎「几帳面さ」、『日本経済新聞』2003年5月19日夕刊。

- 6) 7) 山之内秀一郎「安全運転を支える列車ダイヤと運行システム」, 宮脇俊三編著『時刻表でたどる鉄道史』, JTB, 1998年, 10~11頁。
- 8) 宮脇俊三「時刻表への感謝」, 宮脇俊三編著『時刻表でたどる鉄道史』, 6頁。
- 10) CD『アレッド・ジョーンズ・ベスト・コレクション』(Victor, 1991年)解説。
- 11) 『現代』2003年1月号, 27頁。文中の“Mind gap”には、真ん中の定冠詞が抜けている。NHK教育テレビ2003年9月12日放送の「いまから出直し英語塾」で、看板・標識の表現例として此が写真付き(実際は全て大文字)で紹介された。講師・大杉正明は最も英国の国柄を表わす言葉の一つとし、電車とホームの隙間への注意を喚起すべく、ホームに停まり扉が開けた途端に放送される此の成句は、英国の名物であり暫く滞在した者はニヤリと思ひ出すだろうと言った。曰く、危ないと思ったら隙間を直せば好いのに、手入れをせず“Mind the gap”と言い続ける処が英国らしい; 因みに、“mind”の「注意する/気を付ける」意も英国の用法だ。

最後の揶揄は「紳士の国」の暢気さと二面性を思わせて微笑ましいが、“mind”は名詞として心・精神をも表わすので、此の英国流は中国語の「留心・当心・小心」(留意する/気を付ける)と通じる。本稿筆者は日本流の「照顧脚下」の講釈で、「照顧」と類義の「留心・留神」を挙げた(堀場雅夫[堀場製作所会長]・菊山紀彦[宇宙開発事業団特任参事]との鼎談・「21世紀を拓く為に、我々はどう行動すべきか」, 京都経済同友会会報155号, 1998年10月, 29頁[残念な事に、誤植で「流心・流神」と成った])。『広辞苑』にも収録された此の禅語の原義は、正に足元の落とし穴への警告だ。猶、“MIND THE GAP”は上記番組で「隙間に注意」と訳されたが、日本の駅で見掛けた「足元注意」は簡潔さでより近い。

同じ英語圏でも米国より香港で“Mind the gap”が好く聞かれる事も興味深いが、米国流の“Watch your step”(足元に気を付ける)は、“watch”(注目。留意)で「照顧」の字面・語意に合致する。件の“mind”の語釈に「顧慮する」も有る(『新英和大辞典』第5版, 研究社, 1980年)が、「照顧」の形象・発想は正に顧慮を消す為の照射だ。

池澤夏樹は滞欧後に他国人の目で自国を眺めた心算だったが、参照の光源の導入に瑕疵が有った事は日本人の性質の優勢を物語っている。もっとも、「大杉流・海外旅行術」の講師も言った様に、例の放送は実に奇妙な声調で行なう物だ。帯刀いずみ・久保田暁『マンガ情報版 イギリスの正しい歩き方』(成美堂出版, 1998年)でも、ピクトリア駅のタイヤに書かれた“MIND THE GAP”を冒頭に出す一方、段差や隙間が有る場所で流れた此の表現は、昔は聞き取れず何の事だか解らなかつた、と言う(12頁)。更に言えば、該当の米国流は上記の他に、辞書に因っては“Watch your step(s)”も有れば、“steps”は不可も有る。

何れにせよ、土地勘・言語勘(註2参照)の重要性と獲得の困難さが考えさせられたが、“gap”に当る中国語の「差距」(落差。距離)や「溝」「断層」は、巡り巡って本稿が追求する異文化の隔たりの見立てだ。

- 12) 1986年頃、北京『青年文学』誌主催の王朝作品討論会の合間の雑談で、王朝が筆者に語った言。猶、王朝の生年は正に『点と線』完結の1958年。
- 13) 夏剛「中国文壇の“川端フィーバー”」参照(講談社『本』1989年1月号, 39頁)。
- 14) 「野球の配球を読んでヤマを張る者は、読みが外れた時に脆い。」綿密な作戦はカタに嵌まれば効果を発揮するが、突発的なアクシデントに弱い。」新堂冬樹の犯罪小説・『悪の華』(光文社, 2002年)の此の台詞(350頁)は、日本に於ける伊太利人と中国人の極道の無法無天の対決の中で、一種の異文化の発信の様に聞こえる。松本清張の『小説 3億円事件 米国保険会社内部

時間観念を巡る日中の「カルチャー・ギャップ」の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

調査報告書』(1975年)にも、計画は綿密過ぎると僥倖への期待を招き易い、と青い目の専門家が喝破する(『水の肌』[新潮文庫、1982年]所収、162頁)。一見精巧な『点と線』の小細工も角度を変えて観ると、他力本願の依頼心や賭博性が強く危険極まり無い。

- 15) 宮澤首相は1992年2月3日の国会答弁で、米国では金融市場へ傾斜する余り労働倫理観に欠けており、やはり日本人の様に汗をかいて働く事が大切だ、と発言したが、米国官民の強い反撥を受けた。泡沫経済への警告だったと言う日本政府の釈明で収まったが、事態打開の為に日本側が行なった調査の結果、米国の労働生産性が日本より数割(外務省と労働省の報告で其々31%、41%)も高い事が判り、宮澤首相は大いに落胆した。
- 16) 日本の金融・財政の弱さと製造・技術の強さは言われて久しいが、最近の海外研究機関に由る国際競争力格付けでも其は裏付けられた(「日本は強みをどう生かすか」、『日本経済新聞』2003年6月18日夕刊)。
- 17) 異名・「ノルマ証券」の販売会社の野武士集団的な営業力も有って、当投資基金の資金規模は設定後間も無く1兆円に達し、今も「曾て」の過去形ながら「1兆円ファンド」の俗称で呼ばれているが、運用開始時は厳密に言えば7900億円(其でも過去最大級)であった。猶、当初の基準価格1万円は今年年央からの反騰で、9月に漸く5000円台の回復に成ったが、4000円割れの時期が長かった。只、資産額は今も最盛期の4割程度の4000億円前後に止まっている。
- 18) 実戦経験に富んだ株式評論家・久世雄三の評。もっとも、1年以上も後の『オール投資』誌に出した見解なので、結果論的な後講釈と思えなくもない。
- 19) 伊藤道臣「実録シリーズ プロが挑戦 目指せ1000万円! オンライン株式投資」の最終回・「IT中心に混乱する株式市場 年間運用で成果出せず敗北宣言」、『日経マネー』2001年2月号、108~109頁。本人の弁では、短期的な株価の動きは予想できないので、利食いや損切りのタイミングは一切見ておらず、最大の敗因は早過ぎたIT関連株シフトだと言う。猶、同氏は今も自ら経営する金融関係会社の代表者として、ネット上で株式投資全国選手権大会の主催・運営に携わっている。
- 20) 田中信彦『実録 「中国株」を買ってみた』、『文芸春秋』2002年8月号、306~311頁。編集部が元手を出して書かせた体験記の筆者は、訪中が百回も超え上海に仕事場を持つジャーナリストで、土地勘も社会経験も充分に有るだけに、投資行動は白状の通り素人的過ぎた。6月10日に50万円を使い切って10銘柄を買い、間も無く値上がりせぬ9銘柄を一気に売り、残りの1銘柄に乗り換えたのは、豪快な様に映るが時期と銘柄両方の分散投資の常識に反した。更に理解に苦しいのは、政府の政策変更により相場が全面高と成った24日の直後、上昇を待たず27日に全て処分し、22%の損失確定を甘受した挙動である。

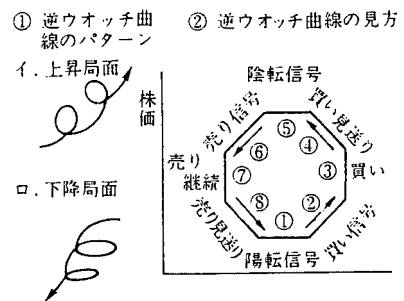
僅か十数日保有した後の一括処分は「日程の関係」だと説明され、雑誌の原稿締め切りや出資側の財務制度上の制限が想像されるが、結果的には賭博の生中継に終わった。常に現在進行形の情報や期限内の結果を追う報道機関の趣向や大衆の需要と共に、随時清算を行なう日本人の慣習や潔く諦める性分も要因に思える。手仕舞いの時期は株主総会の集中開催(註59参照)とも重なるが、一斉挙行と一挙清算の割り切り方を併せ考えれば興味深い。

最後の望みを掛けた万科企業株は手放さなければ、後の1年には少なくとも2回利食いの機会が有ったはずだ。此の銘柄の1年来の長期低迷と最近の暴落で、「一寸先は闇」の中の撤退の合理性も見出せるが、当初の選択がそもそも間違ったとも思える。掲載号特集の題・「中国不信」は、対象の不審ならともかく自らの不振が根拠であれば説得力が弱い。

- 21) 昭和天皇は1950年代に文部大臣・田中耕太郎に対し、教員ストライキ問題に就いて述べた感想。小林吉弥『天皇のお言葉』、徳間文庫、1988年、116頁。
- 22) 2003年3月13日の与野党党首協議で、国連決議無しの米国対イラク開戦を支持するか否かの基準を問われた小泉首相は、国際協議の「其の場の雰囲気」で決めると答えた。
- 23) 小泉政権成立後の日経平均株価の最高値の14556円(2001年5月7日)から、最安値の7603円(03年4月28日、^{いす}何れもザラ場値[取引時間中瞬時値])までの下落幅は、正に半値に近い47.77%。因みに、半値を暴落の最初の下値の目安とする相場の経験則は、其の下げ止まりで立証された。
- 24) 1973年11月14日、キッシンジャー米國務長官と会談した際の言。ウィリアム・バー編、鈴木主税・浅岡政子訳『キッシンジャー「最高機密」会話録』、毎日新聞社、1999年(原典同)、250頁。
- 25) 「各省庁の要望は“税制は年末に決め、年明けの通常国会で処理する”という霞ヶ関歳時記に縛られ、スピード感も欠く。」(『日本経済新聞』2002年11月21日、特集「税をただす」連載第7部「忘れられた“抜本”」2「馴れ合いの要望 重要な政策 置き去りに」)
- 26) 飛岡健『周期的思考があなたを変えろ 満月の夜、なぜ犯罪が起きるのか?』、双葉社、2000年、166頁。
- 27) 28) 江上剛『起死回生』、新潮社、2003年、61~62、72~73頁。『非情銀行』でデビューした作者は本名・小島晴喜で、今年3月に職業小説家に転身するまではみずほ銀行築地支店長を務め、1997年に起きた第一勧業銀行の総会屋への利益供与事件の際に、銀行内外の混乱を收拾した「4人組」の一員だった。
- 29) 和辻哲郎『風土 人間学的考察』(1928年)、岩波文庫、1979年、227頁。
- 30) 熊倉功夫『茶の湯の歴史 千利休まで』、朝日選書、1990年、136頁。
- 31) 水掛け論は中国流で夫婦喧嘩に譬えられ、俗に「公説公有理、婆説婆有理」(^{しゅうとしゅうと}舅は舅に理が有ると言い張り、^{しゅうとめ しゅうとめ}姑は姑に理が有ると言い張る)と形容する。「清官難断家務事」(賢明な官吏も家庭内の紛糾を裁断し難い)と言う様に、此の不毛な対立も一刀両断は難しい。理論武装の無い官庁の不備は明らかだが、弱みに付け込んだソフトバンクの解釈も些か恣意的だ。もっとも、3年を長期と捉える事は同社の投資会社化の証とも取れる。
- 32) 孫正義の帰属意識やソフトバンクの脱日本の国際性に就いて、筆者の「孫正義 vs. 松下幸之助」(西川長夫・大空博・姫岡とし子・夏剛編『グローバル化を読み解く88のキーワード』、平凡社、2003年、162~164頁)参照。
- 33) 「帰化」は語源の『論衡・程材』の「帰化慕義」の様に、君主の徳義に帰服するのが原義なので、現代中国では差別的な語感を嫌って、中国人の外国国籍取得にも外国人の中国国籍取得にも使わない。
- 34) 日本語の「個人投資家」が中国的な感覚にそぐわないのは、「~家」は一家を成す程の力量が無ければ成らない故だ。日本でも此の名称は個人の自尊や欲望を^{くすぐ}擽る物と捉える向きが有るが、「文革」初期の毛沢東の「七億人民は皆批判家」も、造反を煽てる命名と思えて来る。「個人投資家」に比べて中国流の「股民」は、全民的投資熱や市場参加者の野草並みの強かさ^{はかな}と儻さ(漢籍の「民草・草民」も強弱の両義)を連想させる妙味が有る。因みに、此の言い方は「網民」(インターネット個人利用者)と同じ新語なのだ。
- 35) 孔子が晩年に『易経』を愛読した事は、『広辞苑』にも収録された「韋編三絶」(韋編三たび絶つ)の成語で有名だ。天命の把握を勧める言説は『論語』に再三出しており、最後の語録も「不知命、無以為君子也」(天命を知らなければ、君子とは言えない)で始まる。

時間観念を巡る日中の「文化溝」^{カルチャー・ギャップ}の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

- 36) 2002年頃のマネー誌に載った読者投書の言。テリー伊藤の対談系列の題を真似た表現と推測されるが、『お笑い北朝鮮』(コスモの本, 1993年)を始め, 日本共産党や外務省, 創価学会等の「禁域」に次々と殴り込み, 芸能人的な乗りで軽妙な毒舌を捲る彼の硬派評論家と重ねて吟味すれば, 立腹と脱力感, 批判と自嘲, 諧謔と自虐を兼ねた此の「お笑い~」は, 妙に感心させられる。
- 37) 株式投資関係の著述に好く出る「カレンダー効果」(真壁昭夫『最強ファイナンス理論』[講談社現代新書, 2003年]に, 此の題の一節が有る[173~177頁])は, 外来概念の訳語と思われるが, 株式評論家・北浜流一郎が使った「株暦」の用語は, 其の『「株暦」でつかむズバリ!大勝ち株』(徳間書店, 2000年)で示した半世紀来の日本株指数月別騰落率平均と共に面白い。
- 38) 長年囁かれた証券界OB創作説は今年の春に成って, 本人がマネー誌に名乗り出た事で証明された。長い「冬眠」の末の大衆投資熱の再来を兆す事象であったが, 「春動」^{チュウドン}と「蠢動」^{チュウドン}の同音・形似は此の文脈で唆めだ。
- 39) 米国株式の9月の投資成果が百年来一貫して悪い事を示すデータとして, 1890年にダウに投資した1ドルは1996年末に180ドル(配当を除く)に成るが, 毎年9月だけ投資すると26セントに減ってしまい, 逆に9月だけ逃避すると値上がりの累積は681ドルに膨らむ(J・シーゲル著, 笠原高治訳『シーゲル博士の株式長期投資のすすめ』, 日本短波放送, 1999年[原典=1998年], 187頁)。猶, 同書第18章「季節性」(181~190頁)では, 「1月効果」「9月効果」は世界的現象だと言う。
- 40) 『三国志・蜀志・諸葛亮伝』で引用された『襄陽記』の「識時務者, 在乎俊傑」が語源だ。
- 41) 『論語・学而篇第一』の「敏於事而慎於言」(行動は敏捷に, 言葉は慎重に)は, 毛沢東が長女・李敏に付けた名前の由来とも成った。
- 42) 中国語を学ぶ日本人は英語の影響か, 動作の発生時点を言う語彙を動詞の後に持って行く癖があるが, 動詞の前に来る点で日本語と同じなのだ。一方, 行為の期間(持続時間)を示す言葉は, 日本語と違って動詞の後が普通である。日本と欧米の間に在る中国は言語・文化に於いて, 双方と其々異・同を持つわけだ。
- 43) 「写意」は中国画の技法として「写実」の対置概念であり, 形式に囚われず迫真性や表面的な巧妙さを求めず, 自在な筆法で気韻や情趣を表現するのが特徴だ。高次の「意境」(意趣の境地)の創出手段として玄人の中で評価が高い反面, 初歩的な写実が出来ぬ輩の誤魔化しとも見られがちだ。
- 44) 筆者が来日間も無い頃に東京都M市市役所で市民向けの講演をした際, 職員の給与が日本一高いと報じられた市役所で目撃した光景。奇異に思って関係者に訊ねた処, 実は開け具合が悪いから画いたのだ, と説明された。
- 45) 夏剛「共産党中国の4世代指導者の“順時計演変(時計廻りの移行)” 理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化新論(1)」(『立命館国際研究』16巻1号, 2003年)参照(74~77頁)。
- 46) 同上, 77頁。猶, 紙幅の制限で割愛した「逆ウォッチ曲線」(縦軸は株価, 横軸=出来高)は, 附図の通りである(出所=財団法人日本証券経済研究所編『新版 現代証券事典』, 日



本経済新聞社, 1981年, 648頁)。

47) 日本式罫線は時系列罫線(点的罫線)と非時系列罫線(線の罫線)の2種類に大別し, 後者は値動きや結果を強調し或る期間の終値と高値・安値を重点とする(『新版 現代証券事典』[註46参照], 634~635頁)。終値を基準とする日足・週足・月足方式は, 後者の部類に入る。

48) 『広辞苑』の「カレンダー」の語釈。

49) 竹内実が『毛沢東 その詩と人生』(武田泰淳と共著, 文芸春秋新社, 1965年)の序論で, 「“詩”と“詞”」の一節(20~26頁)を設けて詳説した詞の中国的特性は, 残念ながら日本では相当の中国通でないといふと理解され難い。

50) 相場分析家が好き披露する此の類の周期の例として, 1995年以降『日経金融新聞』のテクニカル・アナリスト人気ランキング第1位を長年獲り続けた第一人者・佐々木英信の説を取り上げる。

「二番底”や“二番天井”の影響を見逃さないのが予測のコツ」(『日経マネー』1998年3月号, 161頁)で, 当時日興リサーチセンター投資調査部主席研究員だった佐々木は, 「650日(営業日)前後」の循環を説き, 1989年末~93年初の間に3回有った天・底間の649, 650, 651日の周期を論証に挙げた。一方, 佐々木は2003年の年頭に, 今年は長期上昇への転換点に成る事を予言し, 其の理由の一つは, 「日経平均には343ヶ月, 242ヶ月, 183ヶ月といった節目を付け易い周期がある。どの周期も昨年末から今年の年初に集中している」, と言った(『日本経済新聞』2003年1月7日)。

彼は1982年10月を1989年12月の大天井へ向う強気相場の起点とし, 其処からの242ヶ月経過を根拠に, 2002年11月の8303円が今回の下落相場の最安値と成った可能性を主張した。結果的には大底は2003年4月の7606円にずれ込んだが, 値幅的には大勢に影響せぬ二番底として講釈が付こう。2003年初の朝鮮半島緊張情勢やイラク戦争等, 人為的な変動が時間軸法則の枠をはみ出したとも思えるが, 「当るも八卦, 当らぬも八卦」の皮肉は, 元より無謬を標榜しない陰陽原理には当て嵌まるまい。

因みに, 「佐々木英信のテクニカル講座」の上記の一文で, 著者は1998年1月12~26日の急上昇(14644~17073円)を, 市場の波動周期や過去の騰落幅に当て嵌めて, 5, 6月にかけて1万8000円後半~2万円台を反発の目処としたが, 実際は5~6月には14614円(6月16日)~15972円(6月30日)のレンジ内で推移した。「トレンド的には98年1月安値を向う展開には成らない」との断言は, 10月9日の年間最安値(12879円)を待たずに, 早くも外れて了った。もっとも, 「反発の目処」は反発を仮定した前提での仮設的な数値だ。天気予報や占い師の予言, 歴史小説と同じく, 「不可不信, 不可全信」(信じないわけにも行かず, 全て信じるわけにも行かぬ)。

[再校時補筆] 佐々木は2002年11月11日発売の『マーケット大予測2003』(日本経済新聞社編・発行)の中で, 中勢3波目の底は早ければ2002年10~11月頃, 遅くとも2003年4月頃には終了して来ると判断した(78頁)。直近の2回の底を見事に的中しただけに, 其の底は大勢3波の底及び超大勢波(スーパー・サイクル級)の底とも合致する公算が有り, 泡沫期の下げが最終局面入りする, と言う指摘(同)も信頼できよう。

1949年以降の月足長期サイクルの重複から見ると, 2002年2月に次いで大きな天井・底が発生し易い時期は, 同年10~11月頃と2003年4月, 8~9月頃と2004年1月頃だ, と述べた(同)。今年8, 9月の相場は地球規模の天候異常に似合って, 例年の閑散や下落が嘘の様に余り無く, 懐疑論を嘲笑う様に盛り上がりを堅調に保った(9月の日経平均株価は連続7年の陰線と成ったが, 月末の水準は月頭を下回ったとは言え, 1年前の3割弱高に当る)。世界的な金余りの所産

時間観念を巡る日中の「^{カルチャー・ギャップ}文化溝」の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

と見る向きが多いが、天の見えざる調節も無視できない。

猶、『週刊エコノミスト』主催の機関投資家の投票に拠るアナリスト・エコノミスト格付けで、佐々木英信は1997年から連続6回テクニカル・アナリスト部門の首位に輝いたが、今年の第7回では第2位に下がった(2003年10月14日号、56～57頁)。過去の経験則は段々今の相場に適用できなくなった、と言う関係者たちの指摘を裏付けた結果なのかも知れぬ。

51) 小稲義男等編『新英和中辞典』(研究社)

52) 中国に於ける市場の最初概念は、『易経・繫辞下』の「日中為市、致天下之民、聚天下之貨」(日中に市を為して、天下の民を致し、天下の貨を^{あつ}聚める)で、朝・昼・夕の「一日三市」が昔からの慣わしだ。

53) 夏剛「劫・劫波の数・趨：歴史の環・節と日中間の^{プレート}“板塊”移変・異変考」(『立命館国際研究』11巻2号、1998年)参照。締め切りの9月30日に完成した論考では、1998年10月頃は94ヶ月から194ヶ月等6つの周期が集中する時期だと言う佐々木英信の9月の予言を引き、大変動の到来への予感を記した(9頁)が、校正時の補記(19頁)で書いた通り、佐々木が例示した74年10月9日 82年10月1日 90年10月1日の97ヶ月周期(9頁)が其の直後に示現した展開は、余りにも見事な吻合の故に不気味で成らなかった。

[再校時補筆] 5年前の露西亜発の米国投資基金破綻危機の際と似通うが、今回も再校時に最新データが入った。1997年10月6日に571.66の史上最高値を記録した露西亞RTS株式指数は、翌年10月2日に史上最安値の37.74まで暴落し、今年10月1日に573.85で史上最高値を奪還した。1年で93.4%も下落した後に5年で15.2倍も上昇した事は、新興国市場の投資危険と収益機会の巨大さ、破壊と回復に於ける時間の負・正両面の寄与を実感させるが、上記の日経平均株価と同じく天井・底が10月上旬に集中したのは、何とも不思議な偶然の合致である。

54) ドルの対円相場が10月7日の132円台から、翌日一時111台まで暴落した。反対売買の清算を強いられた米国のヘッジファンドの手仕舞いは、純資産の25倍も動かす梃(レバレッジ)の原理に由る強烈な巻き戻しで、暴投(自暴自棄の投げ売り)の観が強かった。日本語の「玉^{ぎょく}」は取引用語として、「取引所で、取引の対象と成る商品や証券」(『広辞苑』)を言うが、玉の貴重さと脆弱性に由来した語意なら、此の「玉砕」の顛末で裏付けられよう。其の巨富の瞬時蒸発は見方に因れば、先取りの結果で緊縮・変形を強いられた時間の正常化や報復に思える。

55) 11月17日の上昇幅は史上4番目の1200円で、率は8%。本稿筆者が「劫・劫波の数・趨：歴史の環・節と日中間の^{プレート}“板塊”移変・異変考」で引いた佐々木英信の講釈は、『週刊エコノミスト』1998年9月22日号、56頁。

56) 『十万分の一の偶然』は1981年に完結した長篇小説。

57) 夏剛「劫・劫波の数・趨：歴史の環・節と日中間の^{プレート}“板塊”移変・異変考」参照(11頁)。

58) 大竹慎一『あなたが株で勝つための株式投資100の答え』、フォレス出版、2000年、前書き(1～3頁)と「相場の1年はカレンダーとは関係が無い」、「太陰暦(旧暦)と相場は深い関係」の2節(97～101頁)の論点。米国では9月初旬の休日が過ぎた後に市場が活発に成り始め、著者自身が10月末のハロウィーン～文化の日(11月3日)の頃に玉を仕込み始め、翌年の^{ゴールデン・ウィーク}黄金週辺りで利食いをする、と言う実践に基づいた解説は迫力が有る。

世界金融の^{センター}中心・激戦区で約20年も見事な実績を以て生き抜いて来て、今独立し欧州の顧客を中心に1人で1千億円を運用している著者は、竹内実との対談・『元的面子と市場の意志 中華思想に見る経済の原点』(同、1999年)等で示す様に、優れた才覚と異質な発想が畏敬に値す

るが、此の『株で勝つ』が刊行した4月13日は、日本株の数年来の天井の翌日に当たった。書店に株式関係の本が一杯出た頃を過熱圏と見る常識は証明されたが、著者の見識や4月末に高値で売り抜ける習性とは無関係で、出版企画は常に人気の後追いをするわけだ。近年の外債や金、ユーロ、高金利通貨（豪・加ドル）の投資熱は皮肉にも、マネー誌の表紙に立て続け「人気」と銘打って登場した後に調整期に入った。主要マネー誌の号数は発売より2ヶ月も先取りするだけに、些か奇妙な運行であるが、「旬」や其の情報に飛び付く風潮の負の面を思わせる。

猶、資産運用月刊誌4誌は、老舗の『日経マネー』『JAPAN MONEY』も新顔の『あるじゃん』『ZAI』も、日本的な横並びを映して同日発売と成るが、大体20日前後の週末～週初という時機は、下旬に多い給料日を狙う様な心憎い「旬発力」が感じ取れる。

- 59) 外国でも投資基金が決算期末の成績を好く見せ掛ける為の「化粧買い」が儘有り、其の効果が剥げた反動も市場及び運用者が負う事に成る。日本株式市場の年央高と6月末の株主総会の相関も疑われるが、本稿で取り上げた1996年6月26日の日経平均株価の数年来の天井も、翌27日の2241社もの株主総会の一斉開催とは偶然の暗合に思えない。

一方、高校野球の国民的な人気や盆休みの民族大移動の影響は、株式市場の閑散からも窺われるが、元より日本では2月と8月は商売の閑散期（中国流で言う「淡季」= オフ・シーズン）で、報道機関まで「2・8」枯れの様相を呈す、と言う。本稿で取り上げた「節分天井」の経験則は、2月の此の季節的な習性も一因かも知れない。猶、相場の「夏枯れ」は、欧米でも投資家の夏休みに由り一緒だ。

- 60) 7月22日を終りとした理由は明記されていないが、本稿筆者が翌日の大暑に解釈を求めるのは、日・中共通の「時節感」（「季節感」に因んだ造語）に由る直観だ。節氣所縁の発想の傍証として挙げられるのは、著者が此の観点を提示した前書きの末尾（註58文献、3頁）に、「二〇〇〇年 驚蟄 大竹慎一」と記した事である。

- 61) 1993年に6年ぶり帰国した筆者は此の光景に、後鄧小平時代の巨大な変貌を実感させられた。因みに、改革・開放初期のCMには、時計が高級品と成る時代背景を映して、外国製時計（スイスのラドレー [中国語名は“雷達”]、日本のCITIZEN [中国語名は“西鉄城”“星辰”]等）が多かった。

近年の同番組でもCMは天気予報の時間帯に然り気無く挿入するが、各地の予報の共に当該地方の協賛主の名が登場する形は、共産主義と協賛主、中央と地方の複線を感じさせる。胡錦涛体制発足後の今年3月に観た同番組で印象的なのは、胡錦涛が幼時を過ごした泰州が大写して顔を出した事だ。一地方都市が他の地方自治体の中心地と並ぶとは、個人崇拜の時代の毛沢東の故郷も享受できなかった名誉だが、非政治の目的で地方企業の財力で実現したのは隔世の観が有る。

- 62) 毛沢東は建国直前の「論人民民主專政」（1949年）の中で、鴉片戦争以降の西方列強（日本も含む）の中国侵略を、近代化の先生が生徒を虐める事と形容した。為政者や知識人の心情を代弁した見方と言えるが、悔しさを覚えながら先進国に学び続けた処は中国的な実用主義だ。

- 63) 「文革」後に設けた長篇小説の最高榮譽が「茅盾文学賞」である事を考えても、茅盾の代表作・『子夜』（1933年）の文学史上の地位の高さが判る。評論家・篠田一士が『子夜』を『20世紀の十大小説』（新潮社、1988年）の一角としたのは、流石に買い被りの誹りを受け易いが、20世紀前半の中国社会や中国人の不易な心理の研究材料としては申し分が無い。日本文学の類似作品として野間宏の長篇小説・『さいころの空』（文芸春秋新社、1959年）が思い当たるが、前者の4半世紀の先行と規模・迫力の優位は、「魔都」・上海に群がる「東洋のユダヤ人」・中国人の魔力の賜物か。

時間観念を巡る日中の「^{カルチャー・ギャップ}文化溝」の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

周海嬰著、岸田登美子・瀬川千秋・樋口裕子訳『我が父 魯迅』(集英社、2003年[原典 = 『魯迅与我七十年』、南海出版公司、2001年])に、其の辺の背景を垣間見せた逸話が有る。魯迅の親友で其の著書の出版に生涯を捧げた楊霽雲は魯迅の死後、未亡人・許広平の生計の足しに成るよう株の共同投資を提案した。新聞のチャートを基にした模擬売買は上手く行ったが、許が資金を捻出して渡した後の実際の1年間の取引は失敗し、狼狽した楊は田舎の土地を売って損失を受けたと言う。(201頁)当時の新聞にもチャートが広く読まれていた事と共に、此の事例で注目したいのは次の諸点だ。知識人の楊と許は未経験や手元不如意にも関わらず、危険を冒して利益を狙った。此の事は中国人の投資熱の原動力に有る、「窮則思変」(窮乏すれば変化を求める。『易経』の「窮則変」[註81参照]を敷衍した毛沢東の言)の心理を思わせる。今も儘有る親友同士の出資の仕組みは、「有福同享、有難同当」(幸福は共に享受し、苦難は共に分ち合う)の合理主義の産物だ。

64) 蒋介石の1920年前後に投機に従事した経歴に就いて、楊逸舟著『蒋介石評伝・上巻 覇権への道』(共栄書房、1979年)第3章(197-200頁)の、「投機師としての蒋介石」「株屋で一攫千金」等の暴露が有る。株の売買で巨富を掴んだ一幕は曾て秦瘦鷗著『蒋介石伝』に記され、対日戦勝後は同書から削除されたと言う。生涯に亘って運勢・迷信に凝っていた蒋の性向と、其の投機の経歴・嗜好との関連に関する著者の指摘を、本稿筆者は相場の乱高下並みに変幻し易い社会の激動や投機志向が強い国民性と結び付けて考えたい(夏剛「共産党中国の4世代指導者の“順時針演変(時計廻りの移行)”」(1)参照[100頁])

65) 林彪の東北野戦軍と国民党の死闘を活写した張正隆の記録文学・『雪白血紅』(1990年。国内禁禁)に、エンゲルスの論断として、「商業の世界で“時間は金銭なり”と言うのと同様に、戦争中は“時間は軍隊なり”の言い方が成り立つ」、と有る(香港版、天地圖書、2002年、514~515頁)。

66) 取り分け改革・開放初期の1980年代に、外部世界との発展の落差を見せ付けられ、自国の優位性の自信が揺らいだ状況の中で、精神的な平衡を求める心理から、サッカーやジーンズ等の現代の流行は中国がルーツだと言う論考が出た。曾て魯迅に批判された其の自国中心の主張は、自信の回復に伴ってやがて後退した。

67) 中国で名相場師が少ない理由は、色々思い当る節が有る。第1、財成の手段は農・工・商の実業が伝統的に多く、虚業の金融分野でも相場で不確実な収益を追うより、担保を取る融資で金利を稼ぐ事が選好され易い。第2、政治や経済、相場の不安定度が高い国情で、元より危険に満ちた相場では常勝將軍が出難い。台湾の小説が契機で1990年代に大陸で人気を博した清末の政商・胡雪岩も、融資事業も含めて経営が比較的堅実だったにも関わらず、政争や動乱に巻き込まれて、一代で築き上げた巨富を失った。

相場師が居ても名声が広がらないだけだとすれば、投機に因る不労所得への社会的な白眼視と共に、嫉妬を忌む「財不外露」(富を他人に顯示しない)の鉄則も考えられる。相場で儲けた人はこっそりと笑う者だ、と言う常識はウォール街でも有る。相場師の知名度を妨げる著述の少なさは、「敗軍之將不談兵」(敗軍の將、兵を語らず)の逆で、相場の勝利方程式を披露しない保守性が一因か。老子の「知者不言、言者不知」(知る者は言わず、言う者は知らぬ)と通じて、得々と投資術を吹聴する輩には真の勝者は少ない、と日本でも言われる(複数の株式評論家は大衆に助言をしていながら、実は自分は損の方が多いと告白している)。『本間宗久翁秘伝』も無償社会奉仕の心算は無く、当初は門外不出の記録であった。

20世紀後半の中国史に名を刻んだ個人投資家は、伝説的な「楊百万」(本名・楊懷定)を置い

て他無い。建国翌年（1950年）に上海で生まれた彼は、中学卒業後20年ほど倉庫管理人を務め、1988年に退職し2万円の原資で不人気の国債を安値で買い漁り、実勢公定買い取り価格で売って大幅な利鞘を取った。更に上海証券取引所の開設（1990年12月）後、逸早く株式投資に挑み巨富を収めた。「万元戸」（年収1万円の個人・家庭）が金満家の代名詞だった時代に、彼の1992年の所得は百万円に迫り上記の^{あだな}綽名を生んだ。

億万長者の響きさえ有った「百万」は、相場を張る投機の成果と言うより、改革・開放初期の社会の歪み^{よこしま}を突き成長期の波に乗る才覚の賜物だ。最初の財成は国の国債強制購入に対する大衆の不信、通貨膨脹の危険が表面化した情勢、実勢公定買い取り価格に対する都市周辺や農村地域の情報不足を利用し、自転車で一軒一軒廻って取引した収穫なのだ。金融市場に於ける個人「致富」（財成）の見本が上海で現れたのは、相場師の活躍の場になった大阪と共通の商都の土壌を思わせるが、機敏で地道な買い漁りは漁村から金融中心に変貌した上海らしい。

投資の実績を買われ1993年に瀋陽財経学院教授に就任した後、彼は投資実戦を控え金融市場と距離を保って来た。株式投資の成功に因り日本で「金儲けの神様」と喧伝された作家・邱永漢は、著書に「貯蓄十両、儲け百両、見切り千両、無欲万両」と言う金言を記したが、其の4つの境地は楊が見事に体現した。役人・文化人が経営に転身する鄧小平時代の風潮は、冒険・進出の意で「下海」（海に飛び込む）と呼ばれたが、彼の逆の「上陸」は「反対思考法」に合い、中国的な「一勞永逸」（一度の苦勞で永遠の安逸を手に入れる）の帰着だ。

教授に迎えられた事は中国の猥雑さと懐の深さ、実学志向の根強さの証だが、「楊家兵法」の出現に至らなかったのは、相対的不易な法則が適応し難い新興国市場の特性も一因か。同時代の露西亜の激変（註53参照）を彷彿とさせて、国内株式市場の草創期に異様な暴騰が演じられ、上海豫園商場株が忽ち約百倍も値上りした。一握りの「暴発戸」（成り上がり）を生んだ怪気炎は、やがて暴落と長期低迷に転じたが、海外投資者向けの上海B株の指数は2001年に政府の挺入で、僅か3ヶ月で3倍も大化けし、6月1日に付けた史上最高値の241.61は、2年2ヶ月前の史上最安値（21.25）の11.4倍にも当る（露西亜株の5年で15.2倍の上昇〔註53参照〕よりも凄い）。「天時不如地利，地利不如人和」（天の時は地の利に如かず，地の利は人の和に如かぬ）と孟子は言ったが、国策が相場を動かす人治国家では、人智は天の声や時の流れに敵わぬかも知れない。

米国のノーベル経済賞受賞者が参画した投資基金の露西亜国債投資の失敗と対照的に、彼の成功と晩節の保持は「高学歴は無用」「無欲は大欲」の逆説に説得力を持たせた。同じ上海の人で「楊百万」より11歳年下で、1980年代に日本で就学した後、育毛剤商売や香港株投資で巨富を築き上げ、全国長者番付11位まで昇った実業家・周正毅が、今年6月に金融・不動産不正融資疑獄で逮捕された。楊の賢明さを浮き彫りにした破滅であるが、其の株式投資の成功は低迷期の逆張りの王道に沿ったらしい。周の多角経営も一例と成る様に、専ら相場に生計を懸け且つ不敗を誇る存在は、今後はともかく今までは滅多に居なかった。

日本では平成に入った後は仕手集団こそ暗躍して止まぬものの、然るべき心・技・体を備えた相場師はもはや存在しない。「最後の相場師」とされるは川銀蔵（1897～1992年）は、本間宗久翁と同じく大阪で相場を張り、1976年以降、日本セメントや同和鋳業、住友金属鉱山の株の売買で大儲けし、1982年に長者番付第1位と成った。謀らずも後の大衆株式投資熱を刺激したのかも知れないが、79年に是川奨学財団を創ったのは、年齢や本拠地が近かった松下幸之助と同様の「『論語』+算盤」と言える。翻って思えば、野間宏の『さいころの空』の迫力の弱さは、大阪の伝統的な懐の深さに劣った東京市場の浅薄さの所為も有る事か。

時間観念を巡る日中の「カルチャー・ギャップ」文化溝」の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

数年前に読んだ資産運用誌の記事に拠ると、個人資産運用助言者との相談でも県民性の違いが現れており、大阪人は好く助言を請う立場から逸脱し、相場観や成功体験を披露する傾向が有る。一家の言を持つ意味では「個人投資家」と言えよう(註34参照)が、「~家」の名に恥じぬ楊の成功は上海発の資本主義化の一齣だ。鄧小平時代の所謂「十億人民九億商」(十億人民の中に九億が商売に手を出す)は、毛沢東の「七億人民は皆批判家」(註34参照)に因んで、「億万人民」(億単位の民衆)は皆億万長者志望の投資家だとも換言できようか。「楊百万」伝説が生まれた1992年は、鄧小平が南方巡視で上海の経済特区化を命じた時期だが、日本の「最後の相場師」が逝った年に中国で初代の株名人が出現した事は、両国の栄枯盛衰の逆転や亜細亜に於ける主役交代の兆しと思える。

- 68) 厳密に言うなら、彼が発案したのは日本流の非時系列罫線(註47参照)だが、「点的」と「線的」の違い(同)こそ有れ、罫線分析法の開祖の地位は揺るがない。
- 69) 青野豊作『相場秘伝 本間宗久翁秘録を読む』、東洋経済新報社、2002年、17頁。文中の「テクニカル・アナリスト(相場及び株価動向分析家)」は、「アナリスト=分析家」(註70参照)の当て字に沿う表記だが、analystを「分析師」と訳す中国語の感覚に近い。猶、本稿で言及した本間宗久翁の事蹟・言説は、主に此の文献に拠る。
- 70) 昨今のウォール街の相場分析家の激しい浮沈も、現代の花形職業の証と見られるが、『広辞苑』の「アナリスト=分析家。特に、精神分析や社会情勢・証券界などの調査・分析の専門家」の通り、金融は此の領分で新興の方に属する。興味深い事に、相場分析も参加者の精神状態や市場を取り巻く社会情勢を見詰めねば成らぬ。
- 71) 『中庸』が出典の「智・仁・勇」は、「三達徳」(3つの普遍的な徳目)として有名だ。
- 72) 「酒田五法」は「酒田憲法」「酒田足」とも言い、生地の出羽国酒田(現在の山形県酒田市)に由来した。林輝太郎『定本 酒田罫線法』(同友館、1991年)等、技法面の研究書が数多く有る。
- 73) 中国では同音に因んだ「仁者人也」(仁とは人なり)の命題が有るが、「仁=忍」の等式は一種の盲点である。当代大儒・周恩来の政治手法と処世術の真髄は「惟“忍”」の一字と言われたが、彼の「忍常人難忍之事」(常人の忍び難い事を忍ぶ)は、昭和天皇の終戦詔書の「堪へ難キヲ堪へ忍キ難キヲ忍ヒ」と通じる。
- 74) 『論語』を擬った松下幸之助の語録の題は、『松翁論語』(松下幸之助述・江口克彦記、PHP研究所、1994年)だ。
- 75) 1995年7月3日に日経平均株価が14485円で大底を付け、約1年後の6月26日の戻り高値の22666円まで56.5%上昇したが、黄金分割律の1.618倍の手前一步であった事は、中期的上昇波の上限幅の目処を61.8%とする法則に近い。泡沫経済崩壊後の1992、95、98年の反撥で、日経平均株価は其々50.6、56.5、61.7%上昇した。均等に幅が拡大した3回の中で、1回目は切りの好い半分に限り無く近く、3回目は正しく黄金分割律にぴったりだ。因みに、近年のユーロ対円や円建て金の反騰もほぼ6割前後で一服した。逆に、日経平均株価の史上最高値(38915円、1989年12月29日) 1990年代最初の大底(14309円、1992年8月18日)、IT泡沫相場の最高値(20833円、2000年4月12日) 21世紀初頭の最初の大底(7606円、2003年4月28日)の下落率は、何れも黄金分割率に近い63.2、63.5%で、両者の驚くべき吻合も興味深い。

黄金分割律が株式相場の予測に用いられた発端は、1938年に米国のチャートストが打ち出したエリオット波動理論だ。5つの上昇波及び其に続く3つの下降波から成る相場展開は反復し、5つの上昇波は3つの下降波と2つの反動波、下降3波動は2つの下降波と1つの上昇波から成り、

各波の上昇・下落幅は黄金分割率を用いて目標値を算出する(『新版 現代証券事典』註46参照], 639 ~ 640頁)。

- 76) 有力な根拠として挙げられたのは、^{ニューヨーク} 紐育 株式市場のダウ平均株価が1929年9月3日に381.17ドルの天井を付けた後、翌月の大暴落を経て下落し続け、1932年7月7日の41.22ドルで底を打った事だ。
- 77) 日経平均株価の2003年の大底の4月28日は、2000年4月12日の天井から3年経過した。
- 78) 大竹慎一は「日本人の集中力は2年8ヶ月しか持たない」との持論に基づき、次は2000年夏に破綻がやって来ると予言した(「世界的ファンドマネージャーが断言 “日本は2年後に経済恐慌を迎える”」, 『Money Japan』1998年5月号, 4頁)。2000年春の著書(註58文献)でも、「日本の相場には32ヵ月の波乱循環がある」の1節(91 ~ 94頁)で、「石の上に三年」の我慢が出来難い心理を掘り下げた。
- 猶、滝田洋一『日本経済 不作為の罪』(日本経済新聞社, 2002年)にも、泡沫崩壊後3年毎の金融危機が間欠的(中国流では「間歇的」)に日本を襲う、と言うジンクスが論じられた(16 ~ 17頁)。例示された危機は、1992年夏の不動産価格の下落に因る不良債権の表面化と株価の下落、95年夏の両信用組合と兵庫銀行の破綻、邦銀が直面したジャパン・プレミアム(資金調達金利の上乗せ)、97年11月の北海道拓殖銀行・山一証券の破綻、翌年に尾を引いた金融恐慌、2001年秋のマイカル(大手スーパー)の破綻だが、と の間隔は2年なので整合性がやや弱い。
- 79) 『広辞苑』にも有る「百里を行く者は九十里を半ばとす」は、『戦国策・秦策』が出所の成語である。「文革」中の指導者も此の「行百里者半九十」を引いて、紅衛兵を諭した事が有る。
- 80) 南宋以降に成立した児童啓蒙教材・『名賢集』にも入った格言である。
- 81) 『広辞苑』には「窮すれば通ず」(行き詰って困りきると、却って活路が見出される)と有るが、『易経』は「窮則変, 変則通」(窮すれば変ず, 変すれば通ず)と言う。
- 82) 『広辞苑』「三革」参照。猶、『辞海』の「三革」には其の語意は無く、甲・冑・盾の総称(『広辞苑』「三革」)のみ指す。「革令・革運・革命」の名称が中国で生まれたとしても、其の都度の改元は日本独特の現象と思われる。
- 83) 小稲義男等編『新英和中辞典』(研究社)の“revolution”の語釈は、「1(政治上の)大革命。2(思想・行動・方法等に於ける)大変革, 激変, 革命。3 a 回転, 旋回。b [物理学] 回転運動。4(季節等の)周期, 循環。5 [天文学](天体の)公転。」
- 84) 筆者は「劫・劫波の数・趨: 歴史の環・節と日中間の“^{プレート}板塊” 移変・異変考」で、『辞海』の「紅羊劫」の語釈を取り上げた(2頁)が、翌年『辞海』新版では項目が削除された。
- 85) 抗日戦争勝利後の毛沢東は建国を睨んで、封建王朝の滅亡を教訓に民主を以て「歴代興亡周期率」への超克を志した(尹高朝編著『毛沢東の老師們』, 甘肅人民出版社, 1996年, 522頁)。
- 86) 12支の運勢を言う日本株式相場の格言は、「子(鼠)繁盛」「丑(牛)躓き」「寅(虎)千里を走る」「卯(兔)は跳びる」「辰巳(龍・蛇)天井」「午(馬)尻下がりに」「未(羊)辛抱」「申酉(猿・鶏)騒ぐ」「戌(犬)笑い」「亥(猪)固まる」だ。業界紙(誌)や経済紙(誌)に毎年繰り返されて来たが、本稿筆者が注目した文献は、大和証券エクイティ部部长・森本宏の「巨人優勝と五年相場」(『日経マネー』1997年1月号, 81頁)だ。ファンの多い巨人軍の優勝が投資・消費を刺激し景気・株価の浮揚に寄与する、と言う経験則も興味深い。4大証券の一角の株式部門の長と老舗の資産運用誌の組み合わせも示唆に富む。

同誌の1996年3月号と98年2月号でも、其々「過去のデータでは子年は株高 大発会は大幅

時間観念を巡る日中の「文化溝」の考察とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)(夏)

高で幕を開けた「今年も外国人投資家が鍵を握る」と「98年はトラ年 株式市場は虎口を脱せるか? 干支で読む先行き」の題で、此の種の特別調査リポートが掲載された(124, 18~20頁)。「とかく縁起を担ぐ株式市場の世界では、この干支を気にする人が意外と多い。」こんな口上で始まる後者には、戦後の1996年までの実績も挙げられた。日経平均騰落率ベースの三傑は辰(41.3%),子(40.3%),卯(26%)で、成績が最も悪いのは丑(-8.8%),午(-4.6%),寅(5.5%)と言うので、正に格言を裏付けた結果である。

「トラは中国では百獣の王とされているが、過去の相場はどうも冴えないね」と株式分析家・^{アナリスト}吉見俊彦は語った(上記文献「98年はトラ年」)が、「虎」は同音の「胡」と同じ蛮勇の^{イメージ}形象が強い。最悪の丑に次ぐ午・寅は、「馬馬虎虎」(いい加減。まあまあ)との物合で愉快だ。

87) 相田洋・茂田喜郎『NHKスペシャル マネー革命 金融工学の旗手たち』, NHK出版, 1999年, 第1, 8章。

88) ファッションや音楽の流行サイクルとして、色彩や^{デザイン}意匠、^{メロディー}旋律、リズム等は、約50年の周期で回帰現象を繰り返しており、米国の文化人類学者・A. L. グローバーは、スカートの「ロング50年の後にショート50年」の周期の繰り返しを指摘し、人間の寿命から割り出した活動期間と一致すると検証した。飛岡健『周期的思考があなたを変える』では、経済学の常識である4つの中・長期波動周期の紹介に続いて、此の事象とコンドラチェフ波の一致に着目した(92頁)。

89) 生物時計研究の権威・米国のJ. D. パーマー教授は、「バイオリズム」を1970~80年代にかけて米国で流行った根拠の無い信仰と斥け、純然たる科学用語の「生物学的リズム」と混同しないよう力説し、間違いを避ける為「クロノバイオロジー」(時計生物学)の用語を使うべきだと唱えた(小原孝子訳『生物時計の謎をさぐる』, 大月書房, 2003年[原典=2002年], 67~68頁)が、声高く憤慨したのは未だ信者が多い事の裏返しとも取れる。

門外漢の本稿筆者は判断能力が無く、偽科学の可能性も念頭に置き「所謂バイオリズム」の表現を用いたが、長年・広範囲に亘る影響を考えれば、俗説として一蹴する真似は出来ない。3つのリズムの組み合わせで其の日に起きる事が決定され、宝籤が当るかも知れず、有名な人と結婚できるかも知れず、死んで^{しま}うかも知れぬ様な予言として、パーマーは^{うぶ}初心な人を欺く詐術と断じたが、此も単純化・通俗化の嫌いは否めない。真偽、是非、善悪の相互内包を認める中国の観念に因り、筆者は短絡な賛否を避けたい。本稿では後に「俗流」バイオリズムの流布を切り口に、^{コンピュータ}電脳時代の流行と人生哲学の不易を論じる予定だ。

90) 2003年の前半には、世界的同時不況の観が強く反転への期待も高かっただけに、景気循環への注目と関連の分析も多かった。短期・中期・長期景気周期が今全て下降中だ、と言う指摘も有る(みずほ証券シニアエコノミスト・熊谷亮丸「世界経済・為替 なおリスク “不況下の円高” 注意 経済再生、政策総動員を」, 『日本経済新聞』2003年7月4日)。

圍繞時間觀念的“文化溝”之實態及數碼時代中傳統回歸之展望（上）

試觀近代以來日中間政治、經濟等領域的種種摩擦、衝突、誤解、齟齬，其根源不少可歸結於思維習慣及行為方式之差異。此類“文化溝”中除人的價值觀和氣質外，時空觀念亦是一重要方面。本文試圖探討日本人和中國人在時間感覺及時間運用上的不同，對這方面顯露出的雙方氣質作出價值評判。

在本部分中，首先肯定日本人譽滿全球的“清潔、精確、周到”三美德，同時指出其過猶不及的一面，如易流於形式主義、效率低下、忽冷忽熱等；進而從哲學角度剖析日本式時間觀的深層特徵，尤其是即時、即物、即事性濃厚而立體感、整體性淡薄，短線意識強而長線意識弱。

本文不刻意揚中貶日，而有意探索日本式的微觀、寫生與中國式的宏觀、寫意相結合的可能性。一方面批判當今日本金融市場的急於求成的盲目投機性，一方面重新評價江戶時代著名投資家的弁証分析，主張活用其時間軸效果的智慧。由此引出中日兩國的新曆、舊曆並存的“一時兩制”，及東、西洋相通的急激變化＋漸進循環的形而上的“革命”原理，作為適應意識形態淡化的二十一世紀的時間體系的基軸。

（XIA, Gang 本學部教授）